



齊東野語

卷之三

15  
1545  
3

8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7

門  
號 1545  
卷 3.



ほむ紙

印の御  
やくもとくみよひどく。いきをやうべんりつある  
ぬせり。かまひあねけ。なまくとかばして。りゆ  
ちがうだらうもうがはきまでよそなりたる。さくせりと  
ばらふ白扇。すとよせくさんもほくあれば。こまとのれかう  
ざくた。といふくははなづか。かるてああうと  
よせくはくは紙。は質朴なる。のりのりをまねび。  
衣服。飲食。調度。やうのよせ。身乃ほくよまに。まくと  
せき。とりへりめみりに。まくさんとまほく。紙。まくと  
さくらのよとこのもく。まほく。かわひなりて。こくすゑく。ま  
きよくとりなせ。はりく。えうなまきわざく。

一かよと正史實錄の文は。たほやすじとおゆくして。こくす

さあせりゆたれあるまかくもぬまのなせば。ふくらひのたと  
えよかうなどかくぐるやまとよかくはよくた。まよひの  
たらまし乃たぶじよ。そらどほくらひでよもくわきう  
ふき。あらゆりくは。まむじゆをよみがめくもくち  
くねばうれあか。とくべのねく。まくらとちかくせのくとな  
じよひゆは。舞謡のくねば。連歌謡れよくねりあらゆ。さ  
よかのなれたらくべきかよくふくらひ。がくごのたとくに  
さあせりゆたれよ。

「あはれぬよ。かのじゆがわざうめくふくらみのよ。」  
「おまえをもはぶにれまひとくのよ。」  
「おまえをもはぶにれまひとくのよ。」  
「おまえをもはぶにれまひとくのよ。」  
「おまえをもはぶにれまひとくのよ。」

トキヨ  
時代の、あつとひげをもつて、  
あつたるといはれて、それとて、  
ひまわりの下、そよぼよひまわりの下、  
かくさうひまわりの下、そよぼよひまわりの下、  
トキヨ

うへす。そひなつりよひへり。かく記す。おもむきす。

うへす。おもんをねそる。然べなり。

おれがまくら。まみびたらうのあま紀をもかくらとぞ。お  
けなくわもひくらとぞ。おまかせたあらん。ある  
おほかさんを。そはさん人のさへとぞ。おほくら。そん  
ためなまくら。そん。ゆこくらばのほづと。おほくら。そん  
でとくらふもどり。おどりたまば。かあるどてふをはだ  
うひのあやまうこへりなむと。そは事實おとすと。も  
は。トドキに。おもゆくや。つよふとぞ。おほくら。おほくら。

おはすとお先板セシバンと。おはす。おはすと。上中カミナカと。おは  
をせせめなむ。まことれおほくら。かくらまかのば。そ  
れよかくらと。おほくら。そのをりよみあまびと。つよふとぞ。

文化十二年乙亥九月二十五日

醒齋

骨董集上編後帙二卷目錄

下之卷本

- 毬杖一  
○粥木粥杖祝木わひたけ棒四  
○ひのゑの名義ひのゑの假名六  
○離社離合八  
○古書どもに又々離遊十  
○源氏物語の離遊九  
○古製離圖十三  
○ひのゑ衣十二  
○室町家の比比離圖十五  
○三月三日乃離遊十七  
○唐土鏤人十八  
○土離圖二十  
○離使圖二十  
○後の離二十三  
○姫瓜離二十四  
○ひのゑ比調度二  
○又十四  
○伊勢小米離十六  
○離繪櫃十九  
○離枕折敷圖二十  
○ひのゑ草二十五  
○又十四  
○伊勢小米離十六  
○離繪櫃十九  
○離枕折敷圖二十  
○ひのゑ草二十五  
○又十四  
○端午茅巻馬ニ  
○端午頭巾袈裟ハ  
○端午頭巾袈裟ハ  
○糸縷とくとくとくがく  
○目比十三  
○虫のたまご十六  
○子日比離遊贋物の比比奈十八  
○見世棚十五  
○編笠古圖十  
○小兒を愛もふバアトモフハ  
○酸醬を吹きまくレセ  
○比比奈九  
○比比丘女九  
○目あらぐち軒のそぐめ十二  
○宿世焼十四  
○輪鼓十七  
○海老上膳十九  
○ねか豆腐田樂豆腐上物二十  
○板風呂湯錢風呂屋二十三  
○板風呂湯錢風呂屋二十三  
○菖蒲冑再考二十二  
○提燈再考二十四

○行燈再考二十五

○まよなうのてうらんの再考二十六

○古画行燈挑燈圖二十七

○胡鬼板胡鬼子毬杖再考二十八

○手鞠二十九

○天和貞享の比の雑人形圖舟あらつけ盤田三重

○信濃羽子板圖三十

○虫のたれ絹の道考三十一○打出小槌追考三十二

○追加姫瓜節供髪葛子節供三十四

まで五十九條

○上編前後二帙の引書。約々三百五十餘種あり。書目をあぐまない。まよなう。  
○引書の卷のつづきをあぐまない。ほしもまた併せられても。孫引せざる證とし。孫引へこゝに  
ほしもまた。あくまでもやまとへうかぎさればなり。卷のつづきをあぐまない。一冊の物。  
本書のたゞか。伊呂波ワナセモカタハムカ。写本ハ卷のつづきをあぐまない。が  
ゆりれど。あのがそく一本の巻のつづきをあぐまない。

① 雜の假字の事

契沖雜記

小ひくひと聞ゆること多。なへ鳴く。とく。古言擇

も此說ふよ

宇津保物語

君の巻小葉とく。種ぐもあくぬひあるも。あくやくれゆく。

ひよとあくらん。あるゆて。ひよとも。ひよもあくゆのゆゑふ。ひよもくらと

ひよもくら。玉かくま十巻の説ハこれらはたぐり。あくくひよあくり

ハひよをひよそりあまび。かゑくひよかくべきと。ふとかくはたぐり。

とく。おれ此説ふす。おれはひよのかゑをわらふれども

本紀

卷二比賣那素寐の釋小引。私記のことば。比比奈遊。とあり

江家次第

卷十七立太子の條。す。比比奈。とかける古例。あれば。ひよと

かくもひよきよもあくざむべ。されどひと鳴義とさざむるとき。

ひよか。本より。ひよとり六畧言ふて。末あくふ。鳥のすを。ひよ。ひよか鳥。

などへいきどひかとねふかけをいまとあらむとあるをりのゆも人形  
のたぐひもどちひまくはくれる御のとひかとかけと。また本とせらに  
似たり。又人形のたぐひをひかとほじてりとも。ふもきぬすへとくわ。  
たまく齋宮女御集卷下さる。ひか社けいじやうとあれど契冲師けいとうしの校本けうほんとされば古本こほん  
ひかやとあるよりにて。ひきこゑひきこゑより又御堂関白御集ひきこゑのこととが望ふ。  
たまくのきれりとより。ひかや離家あわせ残ふと。とあれど下の御がきふ  
ハコモヤのゆひもやにあく。とあればよふひあやとあるとおぼうおぼうかくとおど  
やかくあと本ませるにて。ひかれかあゆもうとひあまひあまとある。又ひととあく義きを  
る説せつとせぶりて和名鈔ひなふ比奈ひなとあると本の名なとせんと玉たまからまの説せつのごくひ  
りとひまといふれ。ひのあかかめく。おれがおもろあく。ころふ。ひづれをよ  
ともせざがく。あまたまく證あのとくとまもとあまく。今おもくひあ  
かをめられ。おれがまくひかとかといふ。いふくとくと。筆ふりのとてかまのと。

骨董集上編下之卷 前

江戸

醒齋輯

山東

正月男童の力と打撃の變風あるべし。打撃の馬上よ武事をあらわす業よて和漢とも小其あり事ひよ。此方の打撃を考る小。萬葉集

卷六 神一龜古注

四年正月數王一子及諸臣子等集於春一日一野而作打撃之樂云にとあり。神一龜ハ聖武天皇の年号也。古にとおりの爲也。

但書紀 繼紀 後紀缺本

續日本後紀 卷三 丙和元年五月の條よ云 戊午 按二天皇 八日

ホヨ打撃の事アシタニスミ トクテニ

仁明御武一德一殿ヤヨメガタニタケル

帝ニタケル 冷四一衛一府シテシフ 駆尽種ツクニシユグ 馬一藝及ゲイヨシ 打一撃ダキ 之キウ 態ワサヲ

和名鈔 雜藝類ザツエイリ よ云 打撃 宇知劉ウチリ 向別錄カヒタリ 云 打撃 昔黃一帝カイイチタケル 所

造本因兵一勢而爲之 同書 雜藝具ザツエイブ よ云 撻一杖タケウハダ 打撃曲一杖キウハキヨクハヤウ

也タリ 惟タマニ 惟枝タマニシキ の名也。○唐土より黄帝の時始るといふもどかうよりもらず

事物紀原

卷三

宋朝會要を引く云「一越一杖非古。蓋唐世尚之以資

玩樂」也。また唐の時盛ん也。聖武天皇の御時に唐の玄宗の時よりすれば打越のかこみづれ。和漢同時とりよべ。○唐の僖宗殊よらとを

好めり。僖宗帝也。御闈の貞觀仁和の比小あざれ也。○遼小うちを善擊者

ゆきけと

遼史

卷一百一十五  
十ー  
臣傳下ニ「耶律塔不也。以善擊鞠幸

於上

凡駝一驄鞠不離杖」と云えたり

淵鑑類函

卷三百三十一

巧藝部ハよ。

打越の古事

うりびよ詩篇歌

あをあまく戒

たれどさのまわりぐらうれ

かふ

舉ど○こそ打越うり斐ト別れて越杖と稱。一種の玩具よもや

ひぐれの比

詳うらど其

字都保物語

小不そえたり。中比の物よ

ええい

源平盛衰記

卷十四  
法師の首を造て速打の玉を打ぶ如く杖と似て

むら打ごと打駄たゞ踏たゞ

様く小ちたり。太衆兒共態と此玉うよ物ぞと向ひ

是の當時せよ聞え給ひ

太政入道の首也と荅

平家物語

卷文覺上人

岐國へ流されける時。後鳥羽院を越行の冠者らそよとわく花とのやう

ひこうことくる所よ「此君あまりに越打の玉をあせさせ給ふる。文覺をすく小ちり

ヤリ

義經記

卷之二

牛若きびのまうでの段よ云「あくらううり。ぎろ

ちゆうの玉のせう餘あをとくと出。木のえびにりり。ひくろをばあげりうがく

と名付。一つとば清盛かくびととかけられけるが云々

袖中抄

親頤昭撰

十之卷

ちの條よ云「十節錄。黃帝云。取蚩尤頭越之。取眼射之。

云ニ越杖是也。云ニ以彼例漢土。年始用一件事國中無

事。仍日本一國學其例一年始打越杖云

日本歲時記

よ附すたうあらざ

説あべ徒然草

下之卷

さがらすうへ正月小打たゞきらすうを告玄院より

神泉苑へ出て焼あぐるあり。云々

拾學往來

玄惠法

改年初月拾宴

越打云々

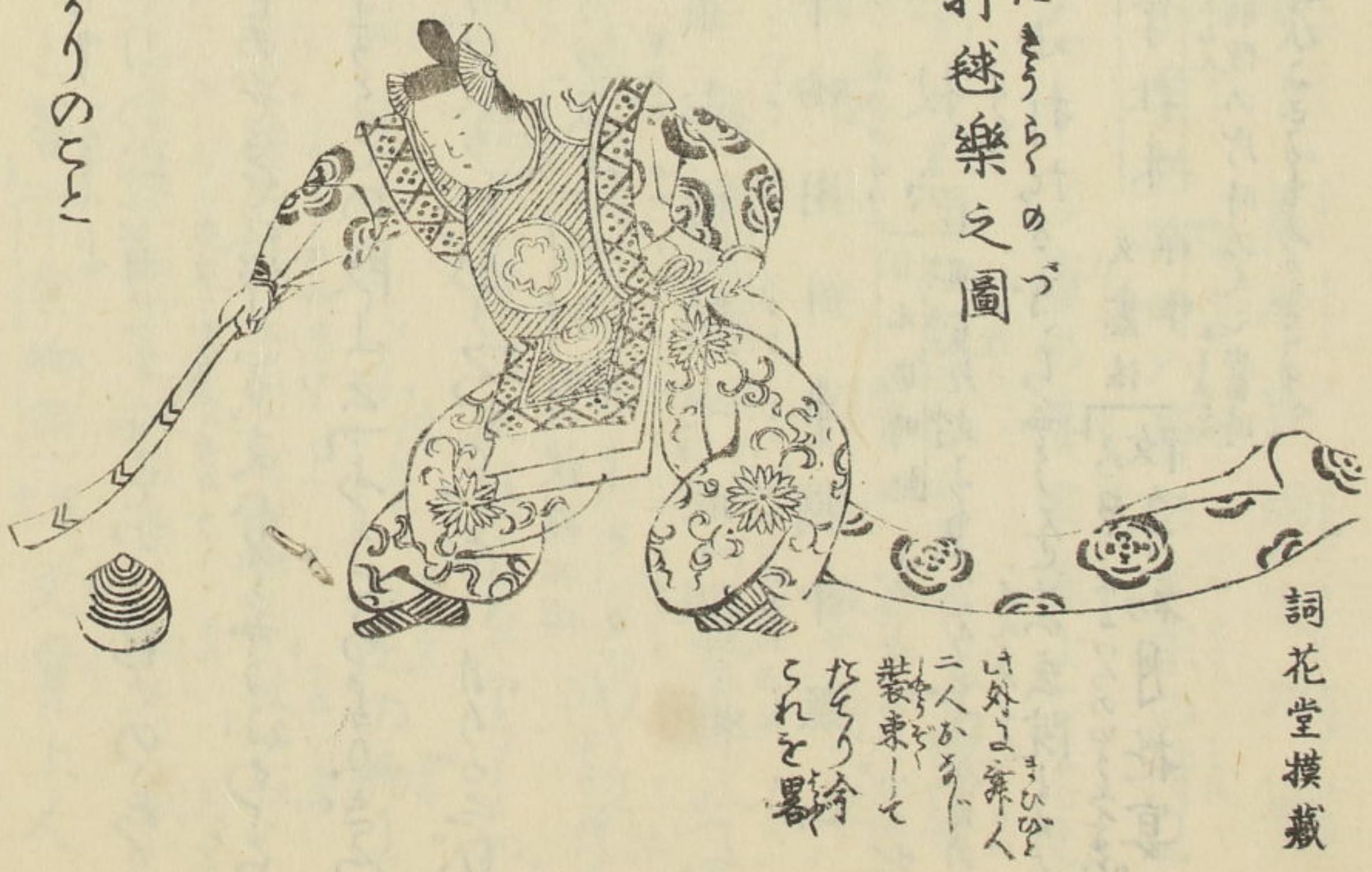
袖中抄の作者顯照也。

後鳥羽院の所時の人也。當時

もとよ年始よ越杖を打しとされば正月の持びよもあきりべ。

詞花堂模倣

○打毬樂之圖



宇都保物語

祭使巻よ云

「騎射」

もそく。と遊りども。こまゝくことなど  
舍人。（あきらめのひと）と遊りども。大臣（だいじん）

すひめくぶ。かうじのかくく。ちやへある。

玉を。さねりどものあり小うげ

つづり。と遊りとも。さう杖を

りちて。りそびと。うちからといまひ

のそが。今。の本よ。枝を。帳よ

作る。あやまつれよ。接ぎよ。されハ四月を。のこ



よそ。まようの亭よそゆく  
うこく。舍人。ども。打毬樂のさゆき  
くらーのそよどくまきこせ。られ  
玩具の越杖のりでくざなまき  
ふ。されば。玩具の越杖ハ打毬より  
車。よう。りよのくら。打毬樂の  
玉を打とまひだる。起まく。き。べ。

そのやうよ。越杖の玉といひ。玉打ともひく。あらん。打毬ハ鞠よ。玉の秋よ。人  
やうされば。近古の越杖の玉もまた玉の形。寛文六年の

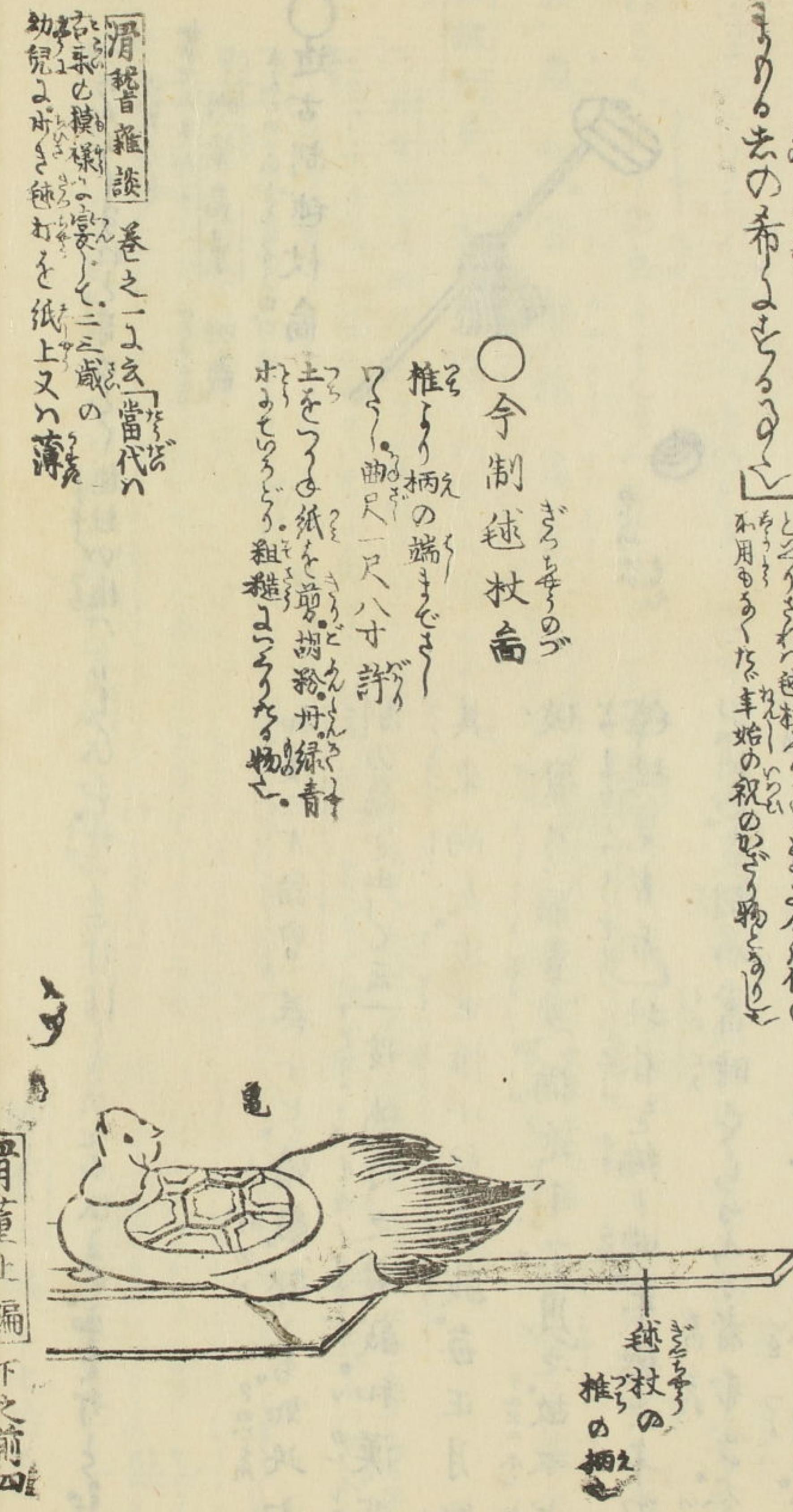
載る。畜。下に。玉と。そんと考へありべ。○りよ。ハ。騎射の後。あく。うど。打毬

樂を奏へり。源氏物語

螢の巻よ。五月。五月の節會よ。騎射。競馬を  
おこなふ。れて。後。打毬樂。落躡。あらん。花鳥餘情

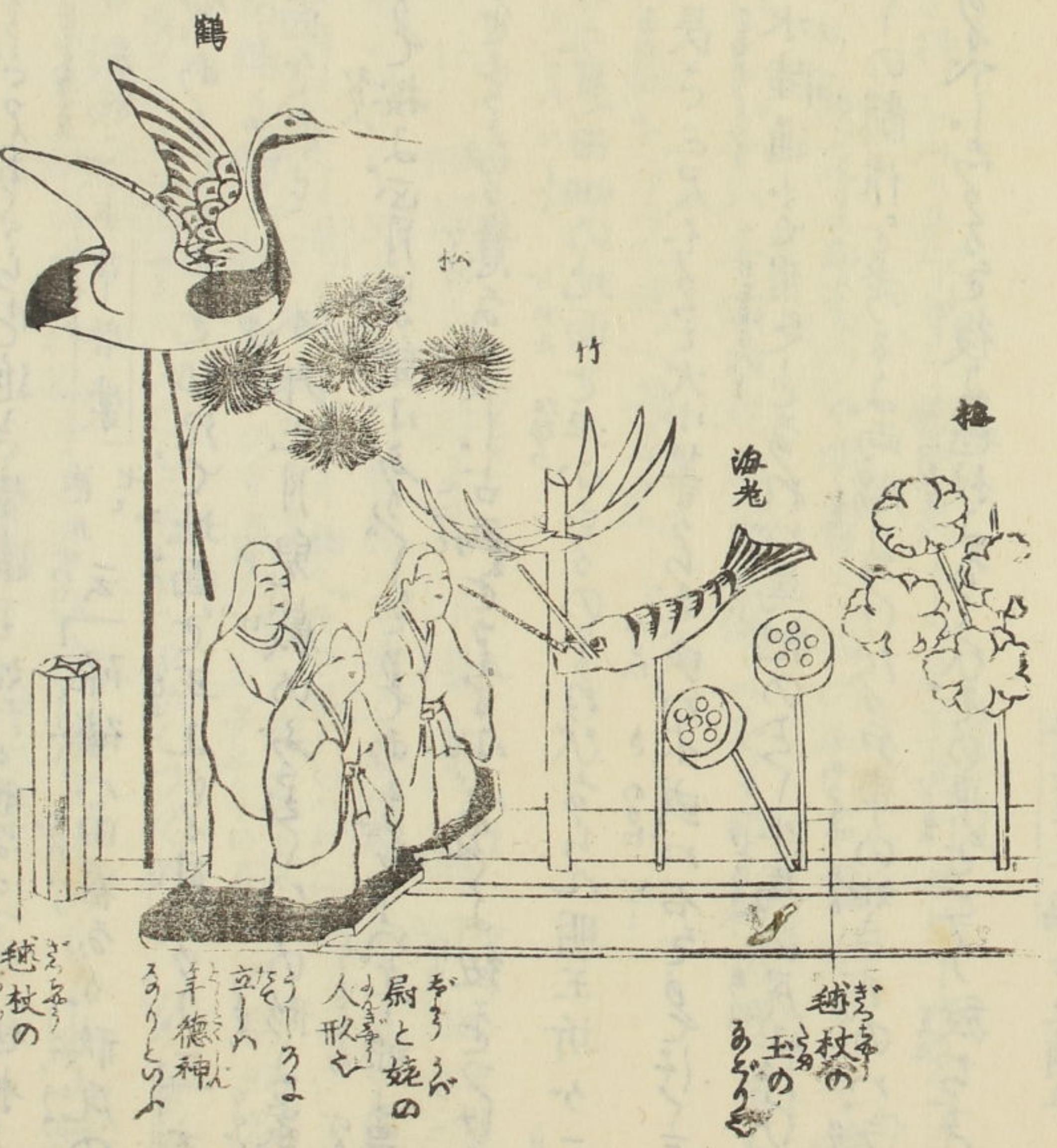


まきあまし。小児の目をあぐさむるのみ。次年の正月に男児より、女児より飾花をかう。醒えぬ花とりつけの宝曆以前にゆりが、二年めよりは、おもてたてのまくらへの巻よもぎとべ。これら等のまくらをわせしと。小児二歳をめまくらともうる。但此事あぐさむるよりのまくらと吉格をまつりたる者希く。まつりの如きとて、とづく。されば越杖やうやくもよき竹の不用もあくな。年始の祝の物とあひ。



○今制継杖高

滑稽旨雜談 卷之一  
「當代」



板よ貼へ鶴亀松竹など造  
ひ徳ニ三才和漢三才画會と同時  
擇へ當時よりそんじふ徳の前  
をもよ今之此制よりしきりへ  
○され京師の人へ月あわせ  
昔より東國よりうれ  
りのうれがとくに其真をと  
かくの画も又こまく

○幽玉ぐ

二

かづくの名に古き書よりまことあらむ。近き昔造を始たる物あるべし。越杖と  
同物ともいへばことえ來別物也。本草啓蒙卷廿四云「碌碡ハ田器也。秋風の  
如すて六稜あり。兩頭又索ありて土上をひたて地面を平まる具あり。三才  
箇會授時通考等より古面を載せ。本邦正月兒戯のがもくの形による  
うり醒云。今此說よりて按よ。正月男兒小がづくをもとめや。年始よ農  
業の才をひびとさせ。農事をもとむ意あるべし。古画を見る。小がづくの紐をつけ  
地上をひく体をかたく画けり。是田畠の地面を平らにするのまねびあらん。明王塙か三  
才箇會を考るよ。碌碡は長さ三尺からと大小等々有り。或は木或は石をもとめて  
畜力を用て田畠の土を打。水陸通じて用之とすれば。馬把のどく牛馬の尻ふぼりと  
のちある物うべ。○がづくの制作を考るよ。兩脇よつけたる戸車の妙きりのへ。え  
地をひく料の車うてあるべ。あらるを後よ越杖よあらひ。その車をどう放ちよ  
地をひく料の車うてあるべ。あらるを後よ越杖よあらひ。その車をどう放ちよ

骨董上編下之前五

投玉と。がづくの紐を持てうや。から一推のうりとうと。玉を打せわへと云フ。  
越杖とかづく物のすにすり歎たよめらひと明。晋万治の比の古面を見んて推  
當小さあり。前よども。今へ年始の祝のから物よどもの。何の所用も  
あきりのとすれど。左よ出と古面をうて考へせりべ。

○羽子板

三

正月女児のりそあそぶ羽子板の始詳あらど。按よ下學集羽子板用正月  
かくのらうあざをつけて。前よどびくいづる。下學集ハ文安え年の春。羽子板の  
今文化十年より。がくそ三百七十年をもと前もとゆく。物。その前よりの比の歴史。故  
てふくらむ。蓋裏鈔卷六。爆竹の條よ。羽子板と云名のと載たり。文安三年の春。世謬問答  
天文十三。上の巻よ。向て云。をひきあたひらのこぎのこじひてつた竹。りづくある  
ゆゑ。答。それのをひきあたひの。蚊よられぬま。かひひす。秋のくづめよ。蜻  
蛉といふ虫。生きの虫をどうす。物。すと。こぎのとひひ。本蓮子あごとえやう  
がくらすて。ものをけたり。これを板をつきあづれば。あつる時とくがうづくの

下學集

羽子板

用正月

すあり。こそ蚊をかそれへりんたりよ。とさることをほきゆるす。

林逸節用

集明應ノ春羽子板・胡鬼板・子とあり。日次紀事延宝四年正月の條云

男兒

擊毬杖一玩弓一矢

子動羽子木板一弄絲絃

又

十二月市中の賣物をあらぐらむ處に毬及毬杖部里くく羽古義板」とあれば。胡鬼板小作りの借字と。羽子木板の上署歟。羽子のことを胡鬼の

手といふも板の方よりこれら名歟ともかもりされど。下学集

ス下の古書小羽子板。てぎりと。胡鬼板とあれば。後の日次紀事を證とて。ハ決ぐて。お下古書をたゞねべ。

○三三私可多鴨

万治二年印本四の巻

田舎人京のやじて。公の持ゆふ笏をと。羽子板を

ゆうんといひ一笑話を載た。これにようて。古制の羽子板の笏又似たらん。今のが笏がまごへべた形又のくどとかひひく。ニ春羽子板といふをつるくよ。いづも笏又似たまご其古制のあくどあるをあれど。下に坐と笏をうるべ

(一)此叢山日本山の外諸明の高山よからずある木の木をつるべ。又らぐのこくふも。玩具の羽子板形

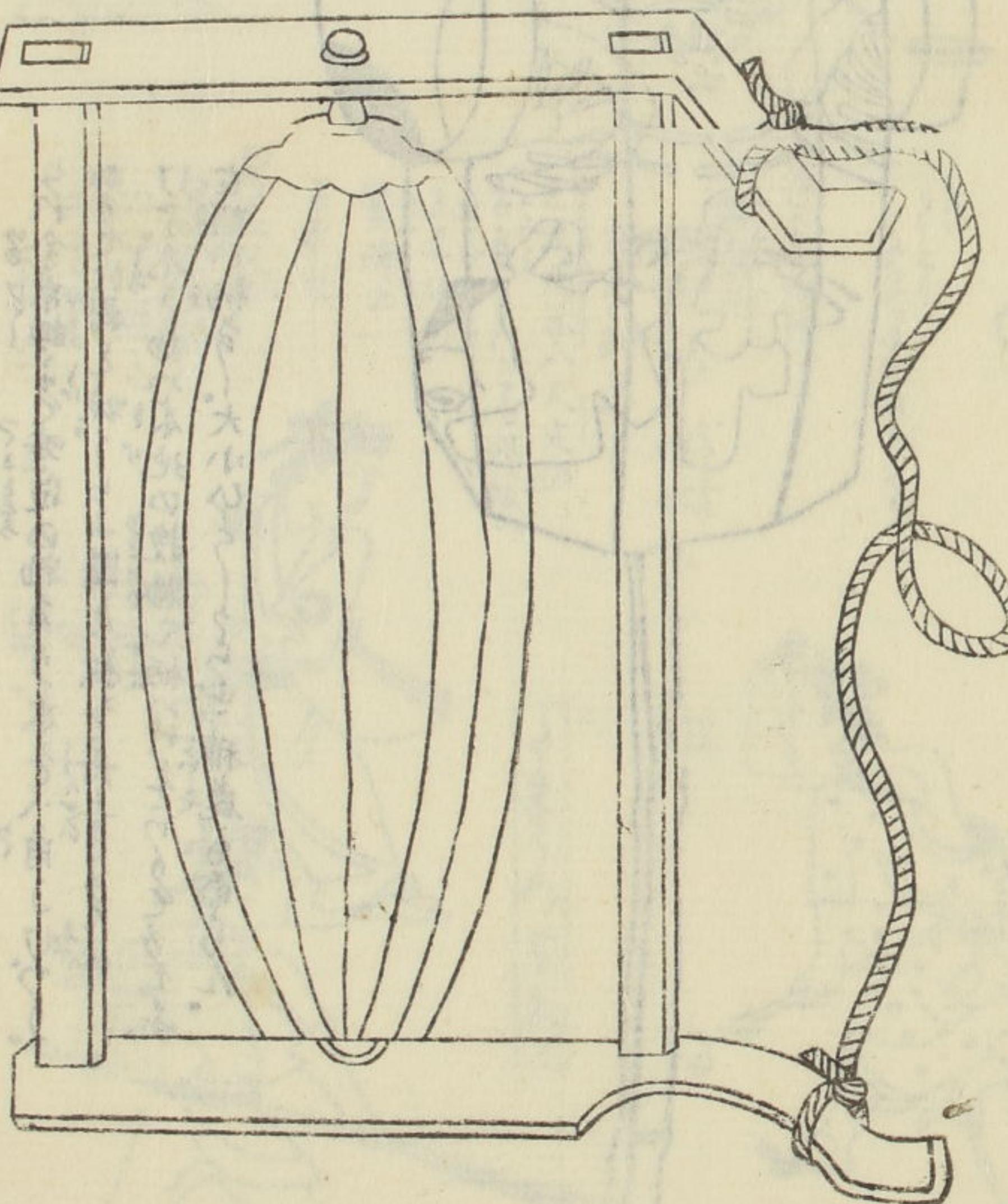
四月廿上編下之前六

○繆毒圖

明王折か

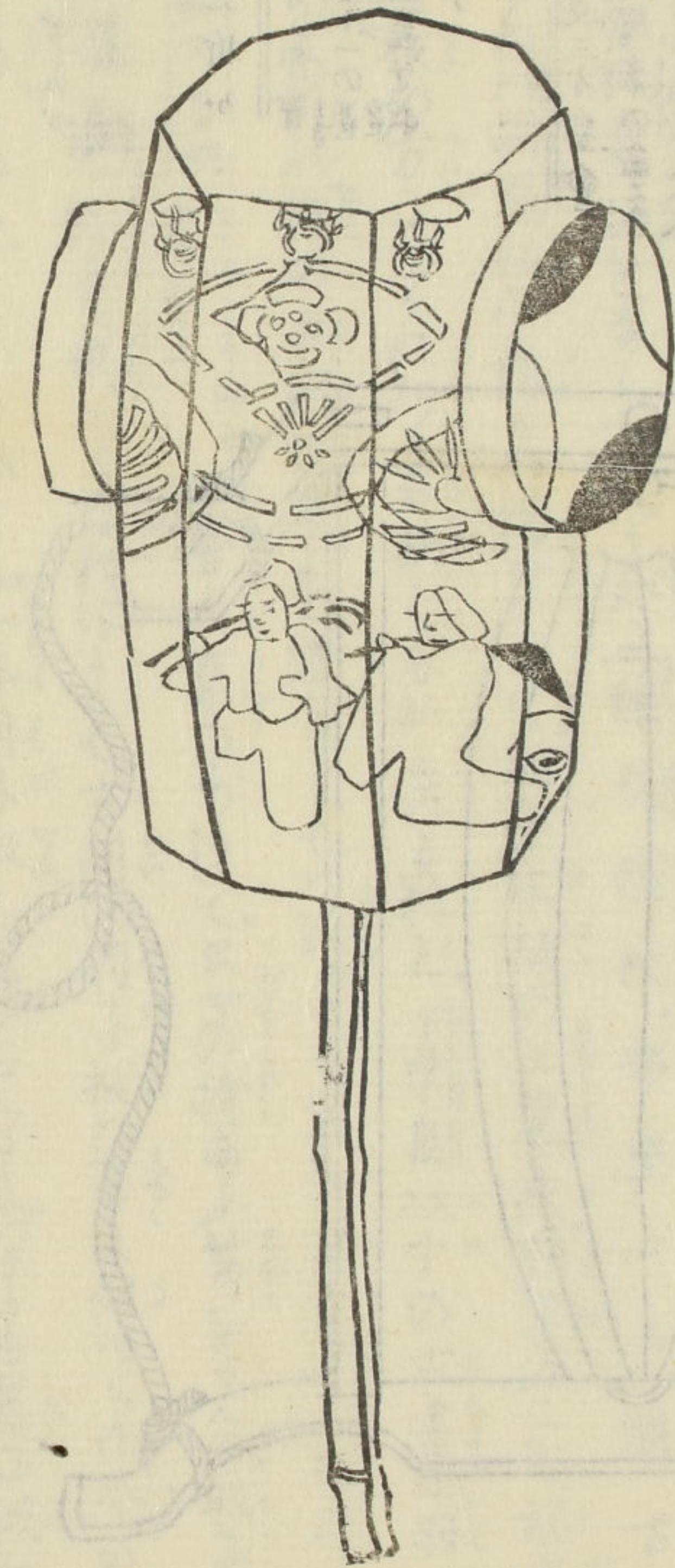
二才公會  
署用十二の巻  
署用十二の巻  
署用十二の巻

澤の松トメアカヤヘモのひと  
みハ繆毒の畜を  
いざとぞ。但卷八十八  
夷果立歎子の  
条よ。繆毒田署  
也本朝田家  
味見とぞ



○ 様子の扇

され今京師より所造の物あり。本を八角扇なり。ありてに尉と姥。うつよ鷹と松を丹青にて画り。おきねは本地の挽物く柄ハ竹とさりてあり。古制ハ柄う。大小ひく。精麗もあらん。



曲尺よりくわくわうの長さ立寸余  
柄の長さ四十寸

○ やうくをりて持て古扇を

貞享五年印行

やあやうくをりて古扇を

日本歲時記

りきて扇をひく。体あり

明暦四年印行

京童

万治三年印行

世説問巻

此扇を以て越前と分りて別

あくを知るべ

を後向番ハ天文の

古書うれども此絵へ

上本の時

當時の

ものを

かきなえ

りれば万治

の比の證と

たゞべく





了。少將内侍

骨董上編  
下之前九

物見ええ、  
下組  
四の「十日粥」の杖にて打たるて勘禁中今も粥杖にて  
女房をうどん男子を生むとぞ。越前うどんはとく  
きとく。本文。  
天正十八年 日本歳時記 貞享五刻 正月十五日の條よ云「今日粥杖とぞ。

不知也

日本歲時記

卷之二

正月

八十

- 3 -

五  
四

四

۷

條

四  
七

九

三

八

三

四

卷之三

八  
木

2

三

物見ええ、一、下紐 四の「十日粥の杖」と打吉にて勘禁中今も粥杖にて  
女房をうどが男子を生じとてうつし。越前もどにいどく。きとあす。本文。  
不知也 天正十八年 日本歳時記 貞享五刻 正月十五日の條よま 今日粥杖とを。  
松枝柴りどよそ。女の腰をうどひみをうむま。うひとそ。今もどるりあり。但  
今い小兒の戯事とありて云々。北國より松の枝を五箇よひろどりて。そくとよそ  
女を打呼あす。西國より棒よそ女をうら呼ゆ。まく。同次紀事 追加云信庵。二。  
等の國よ於て。漆檼木を以て。其長サ一尺二寸許よ切。上下より削掛て。先の  
方よ左巻取。或ハ柳桜花の如き物を紙よそ切粘して。松煙を以て墨を燻べ。  
其紙を取除び。其摸様白残る。墨を号て清祝棒と云。新婦の家毎よ入  
て新婦の腰を打。児童の戯也。云々。此記は延宝貞享

造る。明朝までもまだ見えけるよ。日本風土記卷之二時令の條よ云  
正月十五・云ニ但街道郷村兒童年及十五十八

九外縲于刀一上用レ火焼一黑去レ皮以分黑白之花  
 名曰荷花蘭密再取箭棘之條一抑供香一火神前  
 次集各童手執木刀隊一鬧于途亢有婚久無子之婦  
 將木一刀遍一身打レ之口念二荷花蘭密必使此婦當年有  
 爪生レ男云<sub>ト</sub>謂之枝木<sub>ト</sub>年中風俗考<sub>ト</sub>  
 全浙兵制日本風土記を一晉の名とすひぐとて二晉の名あは梅園日記本年正月十五日印  
 人養草著卷之一解杖の牛をたるて云今も北國のあたり枝の木とて  
 雷盃槌のごくある丸木に鶴龜松竹宝づくの繪を彩色幼男ども  
 いまと産せぬ新婦を打祝ひゆう<sub>ト</sub>書言字考<sub>ト</sub>  
 論<sub>ト</sub>正月十五日の所<sub>ト</sub>云「たのとの牛<sub>ト</sub>」<sub>ト</sub>本上<sub>ト</sub>正月十五日の所<sub>ト</sub>云「たのとの牛<sub>ト</sub>」<sub>ト</sub>婦  
 大の子と云義也。陽朔を作りて童のりこのそびとて女を祝<sub>ト</sub>て大の  
 子と云義也。勝軍本と云<sub>ト</sub>美濃圓泳宮の

をもと云を持たまへと云義也

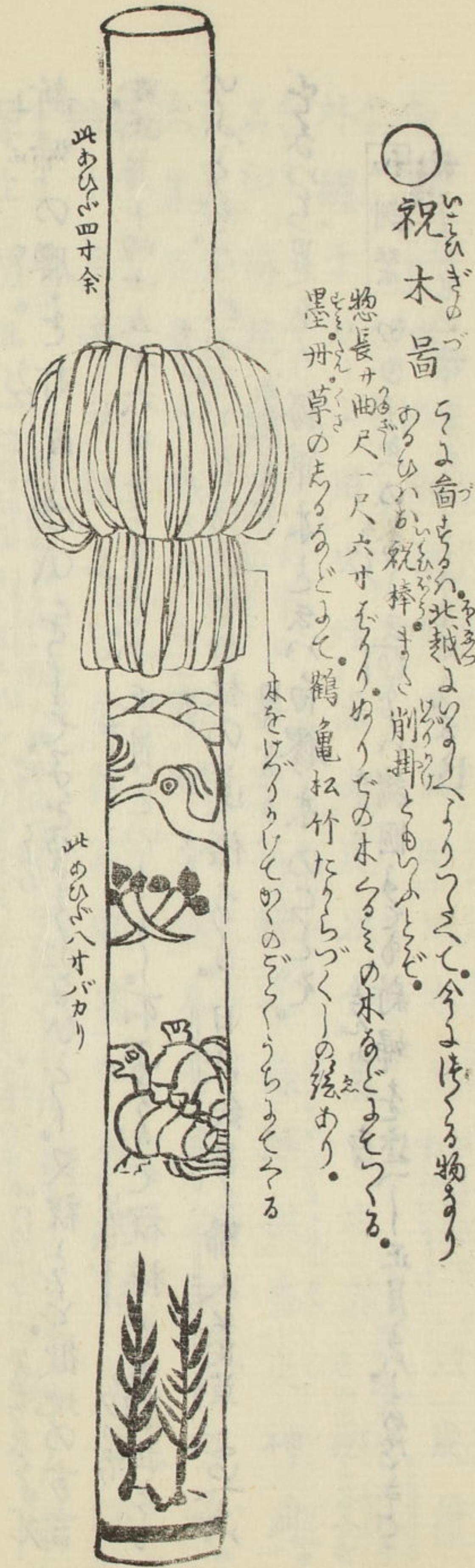
年中故事要言

享保三年印本卷ニ

骨董上編下之前十

木より正月十五日より新<sub>ト</sub>木を削て其削屑の縷の如くあるを枝の頭<sub>ト</sub>残<sub>ト</sub>て名<sub>ト</sub>削掛と云ふ是より女を答て大の男十三人と云ふ然ども其義を知る者す。是も男子を生<sub>ト</sub>と云ふ者を求る祝<sub>ト</sub>木をあらん<sub>ト</sub>木の遺意<sub>ト</sub>傳<sub>ト</sub>今より造る枝ある。勝軍<sub>ト</sub>木を牛と云北越<sub>ト</sub>そ<sub>ト</sub>祝木と云づけゆく<sub>ト</sub>傳<sub>ト</sub>今より造る枝ある。勝軍木とも云ふ或ハ胡桃木<sub>ト</sub>造り春初男兒ある方へかくつうを餅花とも云ふと云ふ。され全く古代のむ木の遺俗す。日次紀事婦人養草より云  
 と云ひ是あり勝軍木と云<sub>ト</sub>向膠木のことぞ。

和訓禁物今<sub>ト</sub>の秋官あると云ふと云<sub>ト</sub>正月よりやまに云<sub>ト</sub>正月よりやまに云<sub>ト</sub>



○祝木呉

木口 うよ口 うちる。北越より入る。今よほる物を  
のりひいわ税棒。もと削掛けともいふとど。  
懸長ナ曲尺一尺六寸七分。ゆくらの木うちの木をとよそつくる。  
墨丹草のあるうどよそ。鶴亀松竹たぐらづくの縁めり。

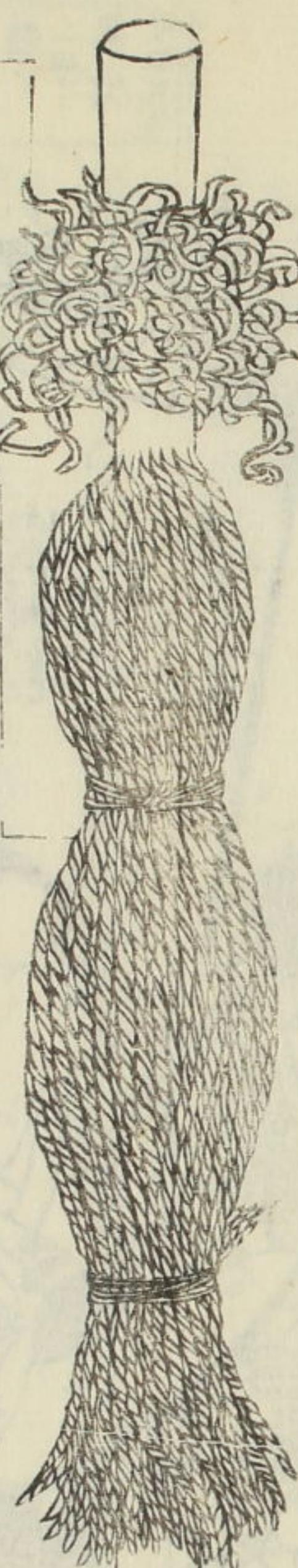
物長サ曲尺一尺六寸七分。内ノ木立。木立ノ本数。墨丹草のある所。よそ。鶴亀松竹たぐらづくの絵。あり。

1

簾中舊記

左義長  
簾中舊記 正月はえたりとひき條よ  
表  
ちりともれども、のちのちりのれありて。一様もあらずて。女房元の右  
肩  
のれゆ乃うへを。二はくそとれうちひ。ちのほ杖よゆすりひが。はるかんがよそ  
打  
ひちとちをあうれりて。春乃時ひぬゑどろくちやうゑよあれひよそ  
絵  
ゆとく。東山殿のじうのるい。あら杖の遺風。ゆのじういとく。正月に嘉例のゆよすりと  
わがも枝よ大をゑぐきし。犬のふをあらくり。たゞも安産あるりのうとびするべ。犬張  
ふを産屋よかとあさり。どうぞあらん。右の北越の祝あよ絵をあくも。これらのもと  
するべ!

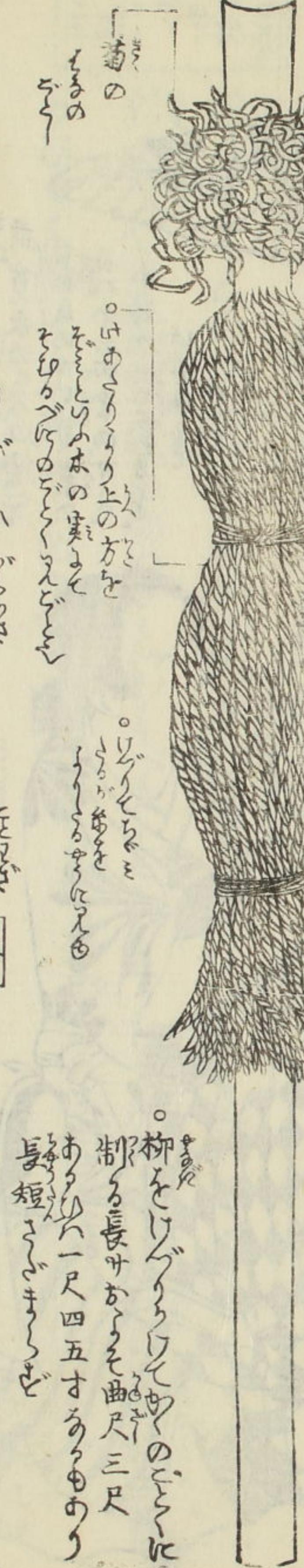
臂上篇



あいだけ 棒の呪  
うとう

ゆきのわうたけ棒  
又祝儀棒とひよどり  
うりつゝく造る杖と  
を祝儀とす。むうの

又祝儀棒とす。もひふともぞ  
されり羽羽よひづく。造る杖も。毎年正月十五日道祖神のまつりと。男  
のわくわうれをひつを祝儀とす。むづくの女の腰を打ふともぞ  
されもやも杖の遺風也。すよ引年中故事要言云々。美濃よそ削掛けとりふりのう  
ひく。○されよつまて。正月十五日軒よけ。けづりやりとえりの考へ別よあり。中編よ  
裁もべ。



か 乳 う お ひ き ま

今世の事より人のよきとるよ。が乳母うばひが

をめつてゐる。ひらりと  
日傘をさして走る。ひらり  
と丹青りとさめぐの絵をあきこどとに菱川が絵よもやくええて。延宝天和貞享の比

○ひのもの名義ひのもの假字

和名鉤 離・和名比奈。契沖離記 離 ヒナ。りひと聞ゆるを。ばん鳴ト。鳥の音の聲をひく。玉川ま 十人の歌をうひきを作りて。うちのひともが物を。物語がくともにひふすとひく。それからひくはくれるを。ひふのひふよ。ひくとも。名す。字も離とゆき。今のかの人も。ひふとりのをうくひわすと。もし。詩歌をあひう。四寺をあひう。女房をよそう。ひくとひく。ひくとひく。ひくとひく。假字ひのものとあくべきを。おとうけるへたゞ。物の離散といふも。別くりふされば。假字ひのものとあくべきを。おとうけるへたゞ。物の離散といふも。ちひまと物へたゞ。の名あり。かれが離の假字ひれとも。決べ。

○離遊のちづめ

書紀 卷五 崇神天皇十年九月、童謡よ比賣那素寐殊望。古事記よりと。游・今案。比奈遊也。とあるをりこれらをひるねおびのりとする。ひづめとす。



わらなりひたす。それ近ん世まぐものじしが。今かにえて。宿よのまのこまつ。

○か乳母曰金華と  
ひの説のりと

それが今ようかうて百七八十年だう

前。寛永のうの絵。青の民の女の質素の

風。今田舎の女よ。

かのうらのられるを。

け古画をも

ちるべし。

内斎擅莫や

家

齊官女  
唐集  
中華書局影印

古事記傳 卷二  
比 賣 那 素 寢  
の契沖が媛遊すと云ふ。媛  
遊とも天白王の美女を集めて宴うるべし  
かと云ふ。比 賣

○ 離社離合 八

齊宮女御集

○ 雜社 雜合

此幸

日本紀記  
私記  
比奈遊  
トあると  
時とせん  
時ハ  
天暦の  
さうとすく  
ありといふ  
ノリとすく

物の事。物の事。  
女々ノ一社代よりありひよひよあるらん。あすひよ。  
社のあの河よ。紅葉ちる。あよそ  
一風さへや祚のあくすりをもたらすらん。もとまきせすよも  
ちるりみらもを。接する。それひまほらひまく祚するをほくまひまえ形よ。祚  
。。。。河原形測濱  
わざわざはらのわざともゆにはくまひのふる。たまむらもけふあわせと

骨董上編 下之前十三



あらうた  
同卷 又云 雪山つらせ落してひいならそびるどりうともよしもみを  
とどす こゝれ冬のひまねびくさうしただの母京極ききくじやくのうへん。さうばのじとあせげともて縁の  
たこまくらう猿さる。云く だまや琴ことのきくくさよとそぎつたごと一聲いつせいよおうきて。だまゆのあそびねまとう。  
りうとめにひまねびくとえをあひととをつう  
○そらびらの巻のひまねびく下よあぐべー  
榮花物語 中八百川花の巻 寛弘五年の  
不<sub>可</sub>云 小  
九〇ひまねびくのつ十もぐりよそひまねびく。ひいなのはう

榮花物語

不<sup>レ</sup>云一<sup>モ</sup>と<sup>シ</sup>ひ<sup>ム</sup>き<sup>ム</sup>の<sup>レ</sup>一<sup>十</sup>も<sup>レ</sup>ト<sup>モ</sup>い<sup>ム</sup>  
ト<sup>モ</sup>と<sup>シ</sup>ひ<sup>ム</sup>き<sup>ム</sup>。は<sup>シ</sup>ぎれむ<sup>リ</sup>を<sup>シ</sup>ま<sup>ハ</sup>。○<sup>ナ</sup>十四<sup>メ</sup>み<sup>ド</sup>りの<sup>ミ</sup>巻<sup>よ</sup>。寛仁二年  
ち<sup>モ</sup>だ<sup>う</sup>の<sup>ま</sup>え<sup>ぐ</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>。中<sup>シ</sup>將<sup>ま</sup>長<sup>な</sup>家<sup>て</sup>。<sup>ナ</sup>年<sup>十</sup>又<sup>二</sup>も<sup>う</sup>よ<sup>そ</sup>。か<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>  
の<sup>レ</sup>春<sup>レ</sup>。御<sup>レ</sup>堂<sup>ア</sup>開<sup>ハ</sup>白<sup>レ</sup>道<sup>ア</sup>。長<sup>久</sup>の<sup>レ</sup>内<sup>シ</sup>子<sup>。</sup>中<sup>シ</sup>將<sup>ま</sup>長<sup>な</sup>家<sup>て</sup>。<sup>ナ</sup>年<sup>十</sup>又<sup>二</sup>も<sup>う</sup>よ<sup>そ</sup>。か<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>  
レ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>く<sup>。</sup>さ<sup>き</sup>れ<sup>ハ</sup>聟<sup>ア</sup>の<sup>レ</sup>か<sup>わ</sup>ら<sup>。</sup>よ<sup>か</sup>つ<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>よ<sup>。</sup>侍<sup>レ</sup>從<sup>レ</sup>中<sup>シ</sup>納<sup>ハ</sup>言<sup>ア</sup>行<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>。の<sup>レ</sup>ひ<sup>め</sup>思<sup>ハ</sup>  
れ<sup>年<sup>十</sup>二<sup>モ</sup>う<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>。</sup>お<sup>る</sup>を<sup>あ</sup>く<sup>モ</sup>ど<sup>と</sup>さ<sup>る</sup>。ざ<sup>き</sup>た<sup>ハ</sup>う<sup>ト</sup>。御<sup>レ</sup>堂<sup>ア</sup>廻<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>内<sup>シ</sup>子<sup>。</sup>を<sup>シ</sup>  
ち<sup>ゆ</sup>び<sup>ハ</sup>り<sup>ト</sup>。達<sup>ハ</sup>れ<sup>バ</sup>。御<sup>レ</sup>堂<sup>ア</sup>廻<sup>ハ</sup>の<sup>レ</sup>内<sup>シ</sup>子<sup>。</sup>○<sup>ヒ</sup>い<sup>み</sup>め<sup>モ</sup>び<sup>の</sup>す<sup>ト</sup>よ<sup>そ</sup>か<sup>わ</sup>ら<sup>。</sup>し<sup>ん</sup>  
と<sup>の</sup>み<sup>ま</sup>い<sup>ト</sup>と<sup>ア</sup>え<sup>た</sup>。今<sup>モ</sup>も<sup>ひ</sup>ま<sup>き</sup>支<sup>ハ</sup>婦<sup>を</sup>  
一<sup>レ</sup>封<sup>の</sup>ひ<sup>ま</sup>の<sup>す</sup>う<sup>ト</sup>。とい<sup>フ</sup>。是<sup>ハ</sup>よ<sup>レ</sup>。○<sup>ナ</sup>十九<sup>メ</sup>御<sup>レ</sup>裳<sup>ア</sup>着<sup>ハ</sup>の<sup>ミ</sup>巻<sup>。</sup>治<sup>ハ</sup>妻<sup>三</sup>年<sup>の</sup>修<sup>ハ</sup>  
「大<sup>モ</sup>やの<sup>カ</sup>ま<sup>く</sup>ひ<sup>あ</sup>ま<sup>や</sup>」<sup>一品官</sup>。<sup>ナ</sup>年<sup>十</sup>一<sup>モ</sup>を<sup>シ</sup>ま<sup>ハ</sup>。と<sup>ま</sup>く<sup>ら</sup>せ<sup>シ</sup>ま<sup>ハ</sup>。い<sup>ま</sup>く<sup>ら</sup>く<sup>い</sup>げ<sup>。</sup>  
よ<sup>が</sup>ゲ<sup>ハ</sup>の<sup>め</sup>ア<sup>タ</sup>ら<sup>や</sup>と<sup>さ</sup>く<sup>び</sup>て<sup>あ</sup>く<sup>ら</sup>と<sup>さ</sup>く<sup>セ</sup>せ<sup>シ</sup>ま<sup>ハ</sup>。ひ<sup>じ</sup>ま<sup>う</sup>と<sup>。</sup>

骨董上編下之前十五

をもううとあるべあぐ。けみきどたとすうまく移がくちを。もくめぐらす  
うたをどりのひもぐうどりひがくひう。されひひよともうとものえさを  
物うる云に○寺サハ若水弱水の巻よ云「うきのふとのうちうる  
いを絶きされば。中畠中畠。ぬぐひりとあきやする。かくうりとまくとももく。  
ひいなみどりそにまを絶く」絶衣 中卷三 「諸ともよそひあら絶ひて。ひいな  
めら絶く。もくら絶ひて。くまくにゆゑびとあら。くまくにゆゑ  
きりとん。ハオニキ。けり。宿のあおくお絶く。ゆゑびとあら。云に  
物衣大將物衣大將。鹿子セ太よ城りよひあ居をひくときあら。や  
ヒテ。をくまえを覺せらる。今とあらうざるを見るべし。同書 下卷四 あり。『駒君駒君。此時十  
六内十六内』。ありゆく。れありさるをひくる。云に  
ちのまくううけよ。居絶く。云に上 上の巻よ云「ひいあを。しまく。ゆく。  
のまがく。市丁のうちよのまうづられりつ。えうき。ひいあを。ひいあひき。と  
増鏡増鏡 四三神山の條よ。仁治二年 四條院代帝仁治二年 治年十一月八十六

古元服（ひこくわふく）しめの故撫政教実公の娘君。尤才よりあふが。女清よまめりゆく。序  
きいたの事をしてる事よ「女脚（めあし）もまざめらひをうかもすれば。といひあそびの  
すうふをえさを残ひける。」源氏をまよへ比治の年までとれれば。がまと二百三  
四年をうへ後れど。當時のひみちがもがうどあるともりる。  
これらの文（ふみ）をかりひよそへりよくのひのひの遊びのさぬをもるべし。

○離の調度（りのひのせいど） 十一

紫式部日記

上卷 上東門院。皇室を産みひー事をしてる事よ

下卷 宮の儀に

まろあひへー納言の君ひんぐにまわくまづ。ちひまたはだい。だらりども。流も著  
墓。湖濱。賀墓。鴻墓。すうのめ。うくへあつ。調度（せいど）。其のまづ。誕生の厄。富士山をも。お。喜の  
のまづ。うくへとづる。われひまねひの具。ひひき。腰枕。鳩墓。すうのめ。うくへあつ。調度（せいど）。  
われひへひひのまをびのてうど

枕草紙

もたづかへことひへきりの。

瀬松中納言物語 二の巻よ云「ほどおり御子に。娘君ニ。よすりあひれば。ば。袴着  
よきをんに。うへまくあふ。云々。ひよそに娘君の出方ひととぞ。ひよそに調度

骨董上編 下之前十六

○ひいあ夜（きよ） 十二

ひの日記

下の巻よ云。けかくらやすむ。うへで。がねト。と。處

天延二年五月四日

雨

まうぐ。さりるこもあきよとかひひ。出でられ。あり。女くも。ひま人形も。その  
だくまつるらを。うる。され。然乃給。寄。未。長。試。書。神。縫。小。米。びふ。ひめ。ひゆ。草。たゞ。ひよ  
さ。かとうのひ。ひま。ね。うね。ひたら。あく。が。ひどん。よ。く。う。ぞ。う。き。たり。じ。る。れ。  
う。う。う。が。お。よ。う。あ。り。け。ん。か。く。ど。あ。る。ら。ん。り。、

志ろまくのころも。かまに。ゆづも。じ。あ。く。そ。ぬ。中。に。あ。ー。あ。べ。く

ます 又え

めら衣あれ。ほぬをうちか。ー。うが。あ。う。ひに。か。と。ー。も。が。ね

夫

悟

打

返

我

下交

隔

應

文

卷之三

卦

偏

四

やうつ哀たちやとぞうるちもあらわくをひくよたのむとおのとく  
按るよかくよりまれしれ。日記の作者。東三條摠政兼家の室道綱。  
の母あり。久の寵かどりへたるをすげきと。是等の哥あり。とよひのふの母と  
どろん。今雛形とりひがごとく。らひとき衣服す。ベー。それを二つ縫て下前よ  
右の哥を一首づでやれり。女神よ進たるより。今の世の女の童。栗浦の能神  
を女神す。紙雛。ひのま形。袖形。又ハ浮き袋。アマ猿。など縫て進る。れ  
これら。の遺意よやあらん。さよりにこころのむら葉よ。有き事。ぞあれ  
うる。○栗嶋の能神。少彦名命。高皇產靈尊の指間より。漏墮ゆ。ひ  
やどめらひとき。あらわしあれば。雛をたてよろすも。あまよ。よんゆ

古製錬圖

此圖がのれが得てする摸本と  
眞物とたゞよそうめぐまと  
ある人ひくらゆゑよそよまく  
他日真物をうそうじ出べ



○同女離面

○同背図

高サ  
三サ二分

袴紅絹



按る又  
ひろきら家の  
比ひひる  
接ひいまと  
二月二日よ  
時さればまれ  
上さるのたのめと接ひよ  
そくまらさる

骨董上編下之前文



紙帳金

離托の記

全一冊實延  
二年印行

○伊勢の小朱離

十六

離托の記 全一冊實延 二年印行 伊勢の神宮より背すり女子のりと接び草す。小朱離の事也。ひよことそぢひよきて男女乃人形を作り。波宜とて衣服を著せ。家基堂乃上よ居坐て。夫婦しおゆん離ひをなすと。接びと字似る。云々と見えたり。おれは事也。伊勢山田の某氏よどひよ。伊勢山田の事也。古傳へ。女児平日の離托びよ。小朱離と。又六分許の紙ひよを造り。その衣服小もろりのをまく。とりひゆ一寸許長さ二寸許のちひよをのふるどの紙よ。丹青りて文様をりうどり。或ひ行成紙あどをちひよ。裁て用ひ。或ひちひよを紅絹のまれうどを添て。表領つきをよてゆるもあらず。またも手のまねうどをひよき一ひよの紙よ。坐敷客間居間臺所など家のまゝ離をや。小朱ひよ。夫婦。或ひ婢女奴僕のふみにくうて。そのまゝ離のあくよ粘してつり垂。人家平日のまゝゆりまゝき体をまびびて。常のりと接びよあらる。今

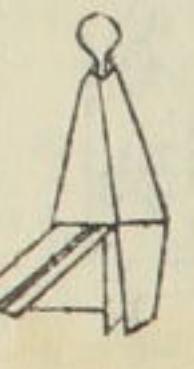
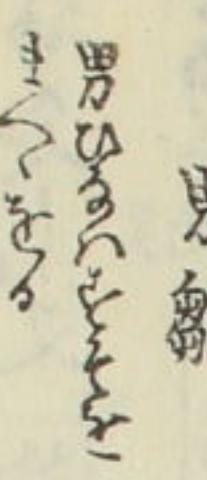
まことに八十年許前より。享保のまことに小采びよりよ名を  
 まことに人稀なり。年八十余の老人よあらわしあらざとを咎られり。童乃  
 りをねびも古から質素すとありて。添氏の跡がのうへのひいなねびよ。  
 ちひさき屋形をつくり。ひりみをあともとめねび給ひ。ととあどありひあ  
 されば。小采びとい。古の民の童のひいなねび。それが享保の末までも傳り  
 うべし。ひいなねびとちひさき義すれば。小采びくわづる。本ぞかし。○右の離姓  
 の記云。神代の時云々。岐佐宜といふのを作りゆくと。は岐佐宜といふ  
 前より。神宮之そ離よ着せらる衣腹を岐宜と名付。は岐佐宜の中の作を  
 畏して。詞す。云々」と。○古事記の手間山本の段の岐佐宜のこと  
 あぐれどひがくと。岐佐宜の訓。さげ。き。さ。め。ん。あ。と。古事記云  
 假。き。さ。げ。岐佐宜といふ。見すどを研。削ること。今。の。言。よ。こそ。げ。ると  
 用。い。く。よ。あ。く。是卷ナヒ。まびつ。されば離姓の記の説ひ。い。と。ひ。が。く。と。そ。

今も伊勢の山田あらしにて。孩兒小りうどり。物をうへせて。まへまへと。  
 又ハ端午の懺。うどをえせて。懺。ましく。とりゆ言残す。うつうき衣腹をま  
 やさめり。ま。と。う。と。う。と。う。う。た。物をう。と。う。の。言。う。そ。の。言。義。の。知。れ。

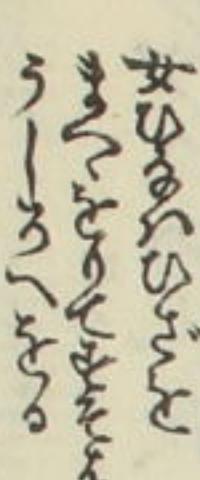
○ 伊勢小米離畜

伊勢山田の人。年八十余の老女。幼き時代ひるをつくり。うどをあそび  
 くり。とかね居て。人よそ。うつうき衣腹を得。うつ。う。と。う。う。た。物をう。と。う。の。言。う。そ。の。言。義。の。知。れ。

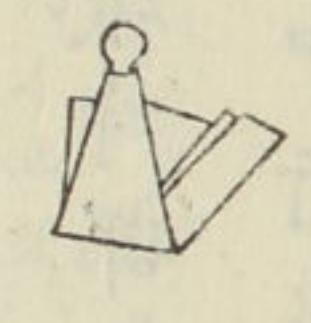
男離



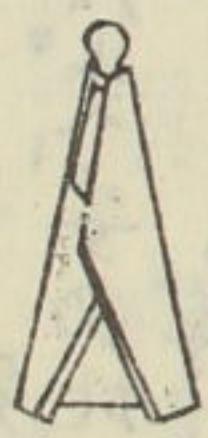
女離



前



男ひみ



金作男女ひみ

○ 三月三日の離遊

四

とあやめりあらべ。天正以後の事。○三月上の巳の日水辺よ祓事。和漢  
ともよ古く。源氏物語。次磨の巻よ。源氏須廣へ左近の時。三月の朔日巳の日  
も。浦邊よ出陰陽師をめぐて祓せまを捨ひ舟よとくに人形をめせて流すを  
経ひしゆうえ。加茂保憲女集。よハ申不ぬまよあきさうでさぶとあぬぐくつその人  
のうちをうちもん。あごもいへれば。上巳の祓よ。天兒を水」流せり。ゆもあじしきべ。  
後ちよ。三月上巳を雛祭の期とぞ。是日。母子の遺意よ。天兒母子の贖物よ酒  
食を供す。りろくの凶事を見よ。おのれくが身を祝ひ。古の雛祭びの方  
よううて。づひよ。今のがくよ。おれるうべ。國朝佳節錄。三月三日。兒一女  
制。紙一人。爲。翫者。贖物。之義。乃。祓具也。云々。とづり。然則原潔  
身の神事よ。起りたれば。今のきよん雛祭とひどと。雛祭と称するも。縁より  
よるゆきりけど。

○おのひのみせびたり。われのくえ。今おひたはあれのねびり。よあらう。女へうそたし算に。嫁なましとれ  
夫めよあらがひ。男おとこい外ほかをとまざ。女めへ内うちをとまざ。よりのうれば。幼時むろり嫁なましとれよほうす。ひど。

あま  
がつの  
考別  
あり

家業の事もひよねびよそそのまわびをう。また別うへしむを。本意とさめられが。民の  
童れどもに飯りくわざもられよ。又別家内ひちまき作をす。ねび。貯蓄素をもしむと  
して。美巧をうむじまとんごとく。今ゆせめ女四人の男女のやうらをほくよそ。夫婦ど又奴婢の  
ああふうておぐまぞ。うそて中昔のひよねびよのゆかよひ。伊勢の小糸びよゆかよひといふべき。

文昌雜錄

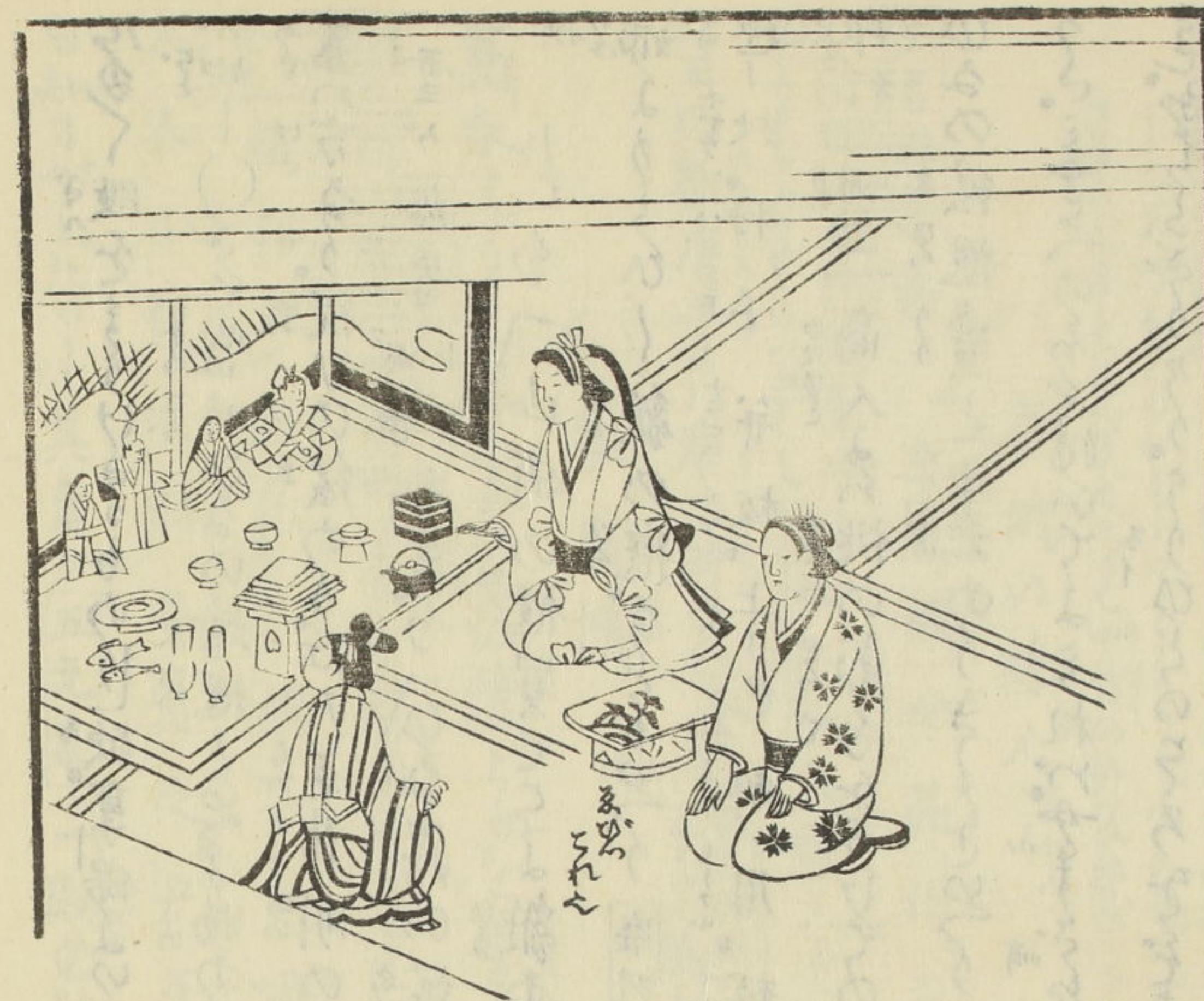
卷三  
丁四  
云唐歲時節物云云三月三日則有鑄人云

1

離繪櫃

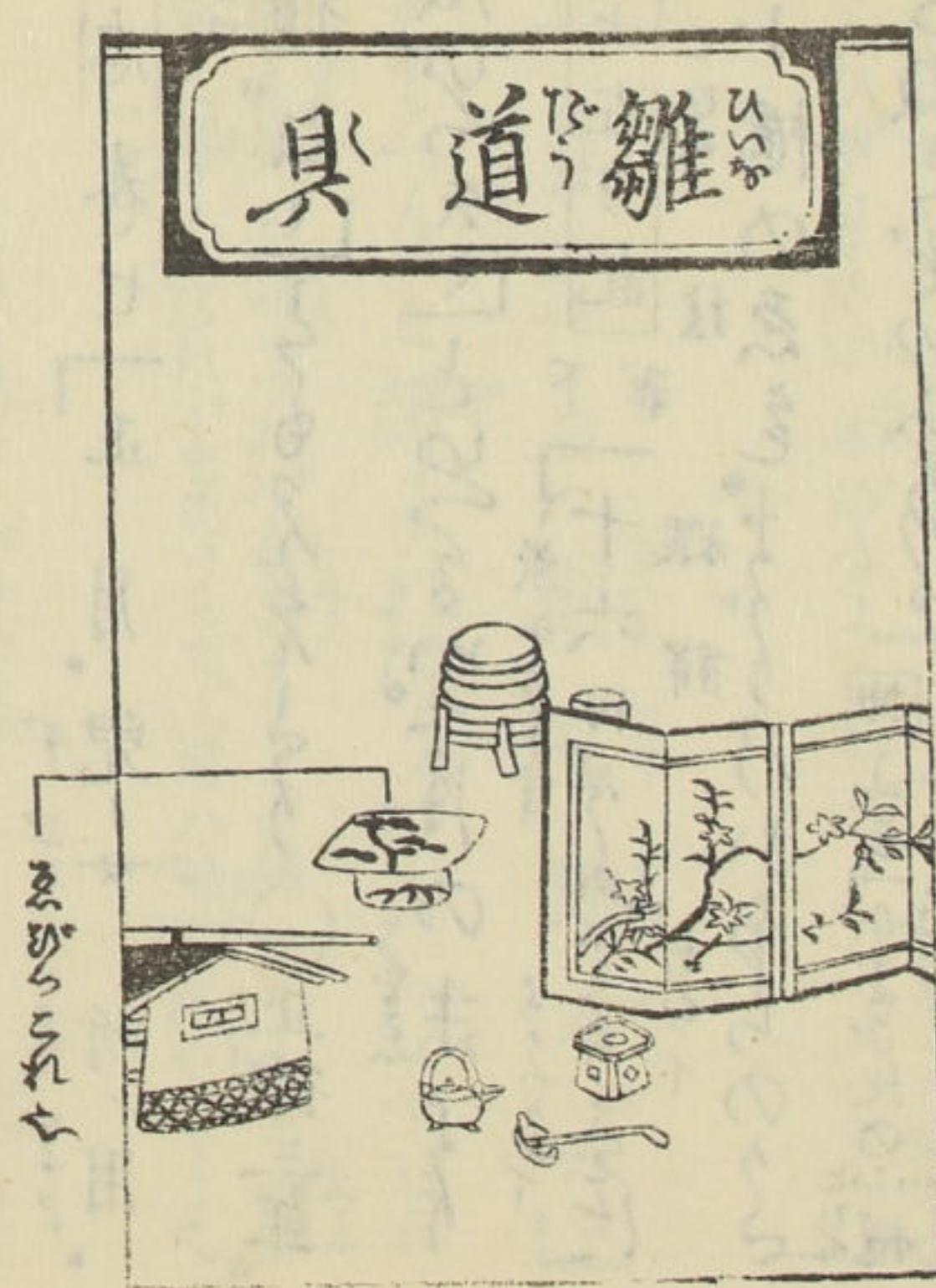
實永より元禄のゆひたの繪どもを参考す。よ當時の雛をいふ質素  
きりとちよ坐上より物とをゑどのとよし壇をやうらうとす。  
五  
三刻七 卷七 倭俗以レ紙作ニ小偶人夫婦之形一是謂雛壹對其外  
大イジン人セウニ兒之形各造レ之女子並置坐上云々と云う。これらより  
も知るべし。其角が五元集二段だんのひよ清水坂を一目ゆふ。とて發向もあれば  
も知るべし。其角が五元集二段だんのひよ清水坂を一目ゆふ。とて發向もあれば  
雍列府志ヨウリョクブシ 貞享セイジョウ

○ 貞享五  
年印本 日本歳時記より載る離遊の図



○元禄元年印本 女用訓蒙箋彙より  
載る絛櫈の図

道離具



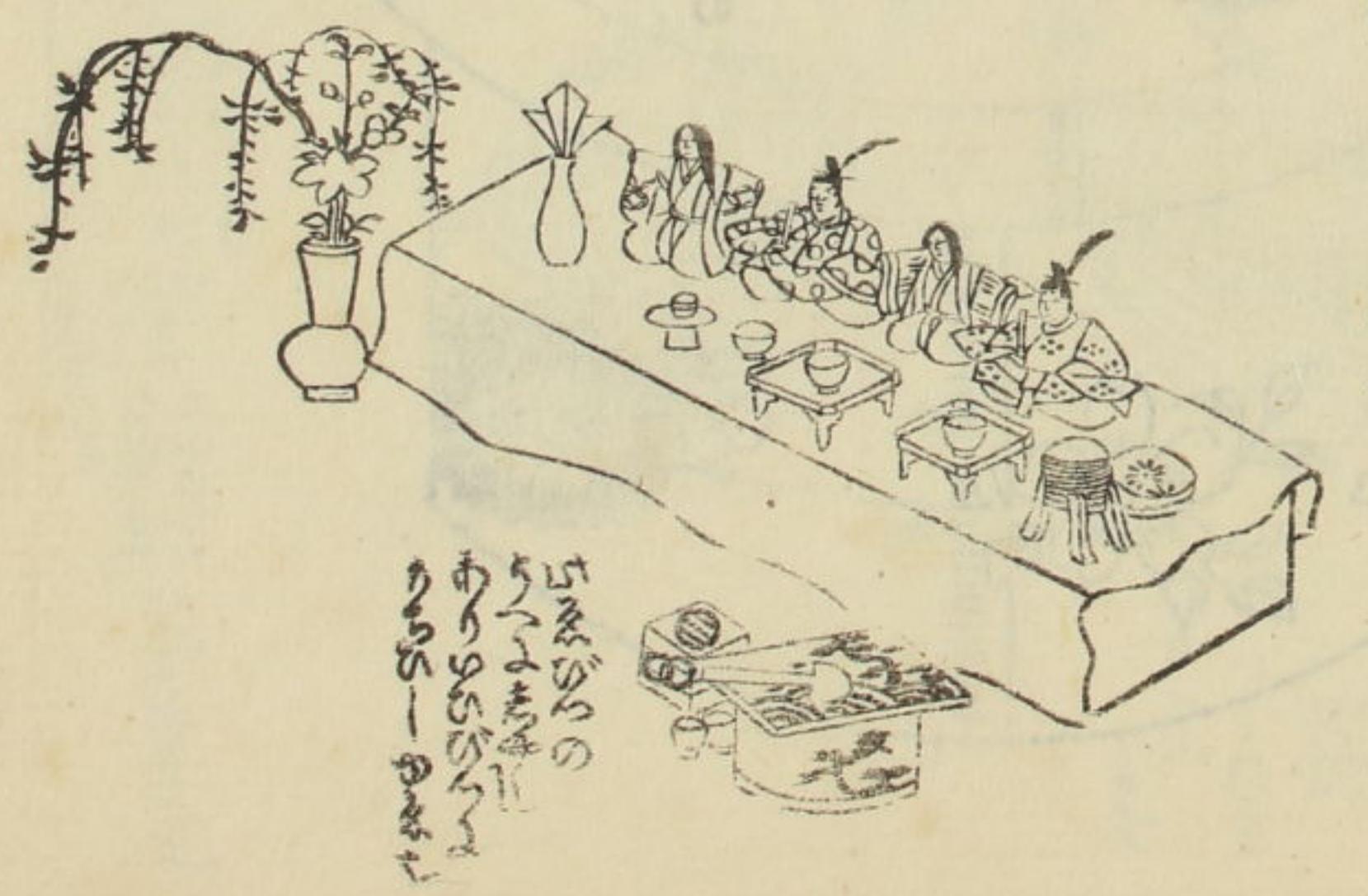
當時のひよせびのやのどく  
段をすうりてたゞ坐上よ。  
あ物へとどゑあくのまゐにこれら  
うきやげの貨素をらふべー

骨董上編 下之前二三

○享保十七年印本

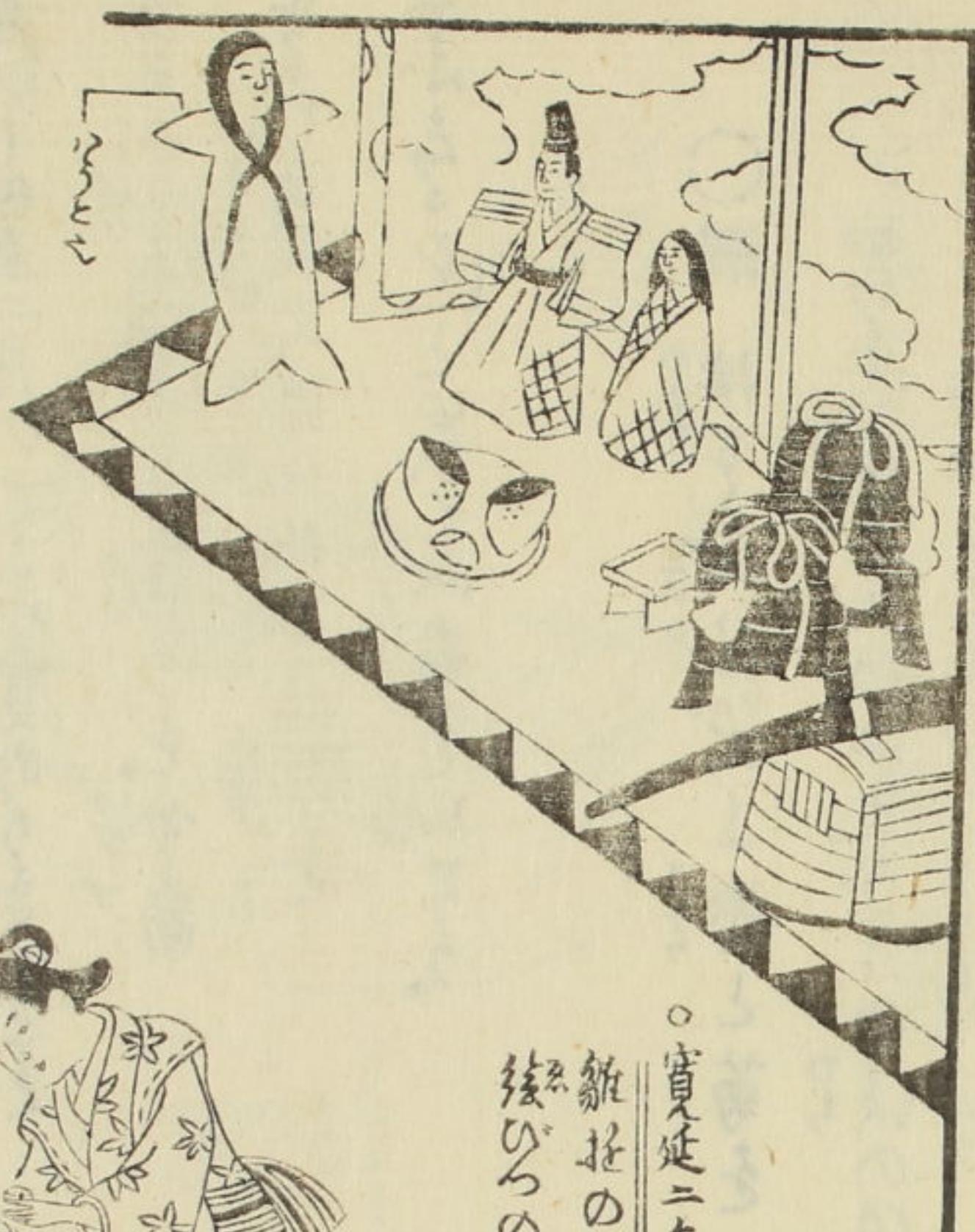
女中風俗玉鏡

より  
載る図へ當時へ  
かのどくふるよ  
一段をすうりて



○元禄十年印本島居清信が  
かけら籠のうちよば画あり

○寛延二年印本  
雛枕の記より載る  
絛りの図



按るゆめのどく  
達子紙ひみつどく  
あす立はせもまく一ゆゑよ  
立籠ひよきあどりか一え  
今もひよきよろとりよ言のれ  
まごとあをきゑあくをなつて  
ごとそれと別するべ

諸国奇遊談

寛政十一年刻

よ。絃櫃のみをりてゐる所よ。

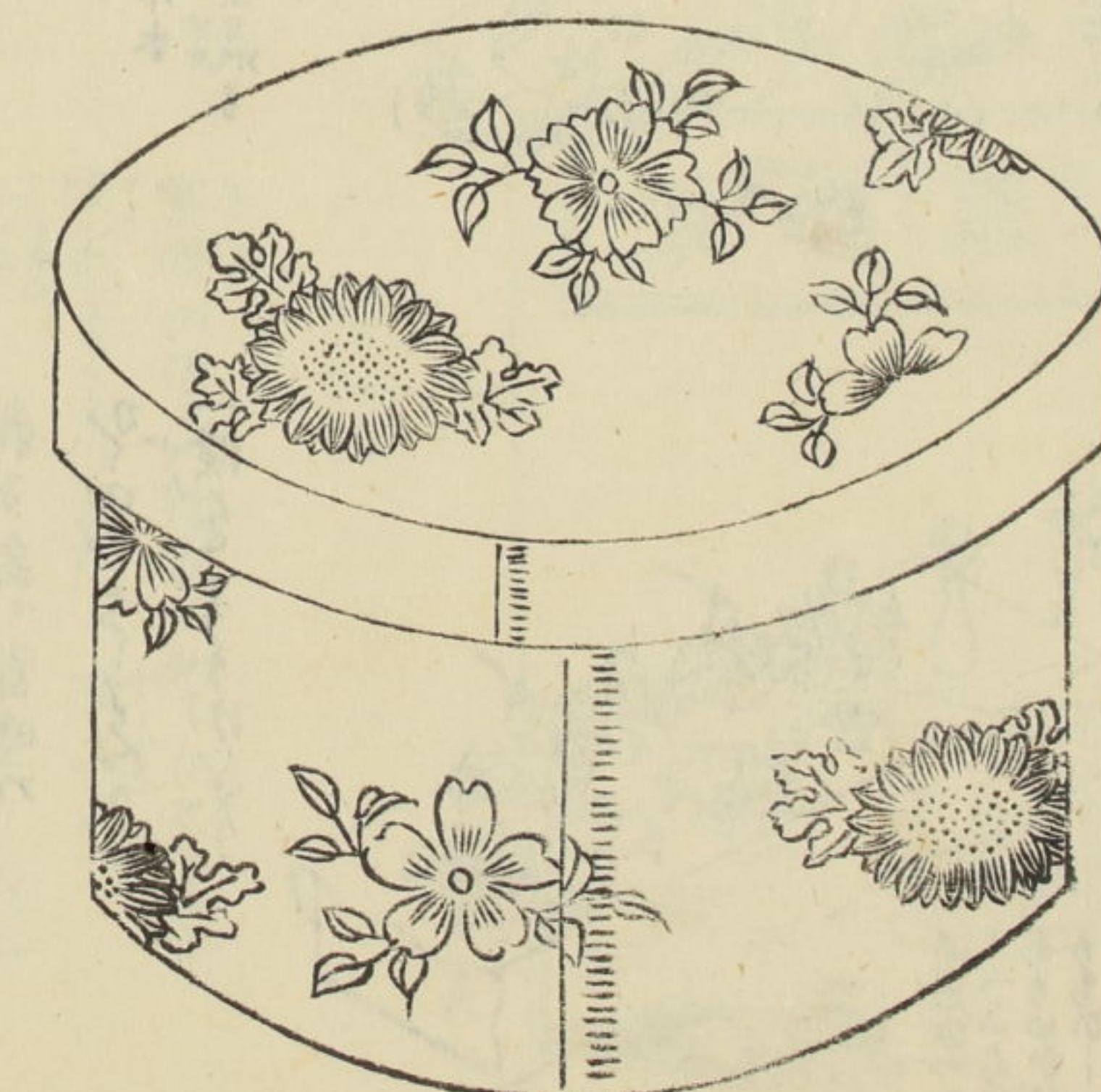
今も洛北の村里より。二月の節より。どつて  
勝用ふ。予が幼時。宝曆のまことに。於すても  
用ひて。也。二月の末より。賣あつた。こと  
うす。今ひなえて。見えぬら。と。今。箇  
やう。遠國。又洛北の今。の形を  
そ。ある。そ。とりひて。此箇を出せり。

○醒 按。よ。此絃櫃よ。櫻と菊を

や。ソ。る。三月のひひと。九月の後のひひとと

うすた。絵。き。べ。う。れ。近。世。の。制。う。れ。ば。う。び。

骨董上編下之前篇



○享保の比の土籠 箇

土をりて。ほくを焼て。胡粉丹。緑青。  
うどくのろ。う。かのぐり。古色あり。  
かく。享保。考。後。の。物。と。い。ゆ。

深草。ゆき。みり。や。む。く。ん。

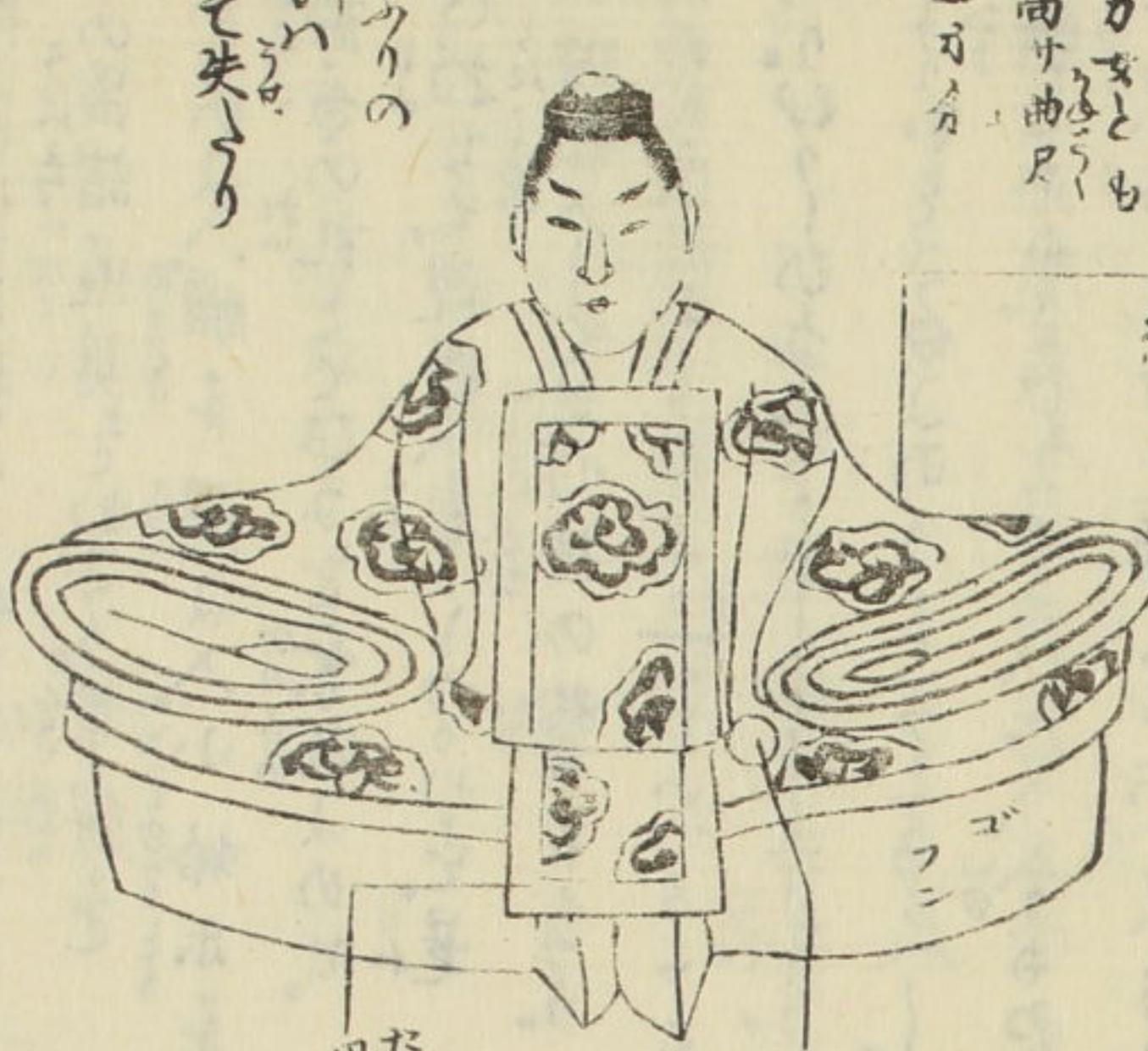
ゆき。の。質。素。形。を

え。く。れ。り。

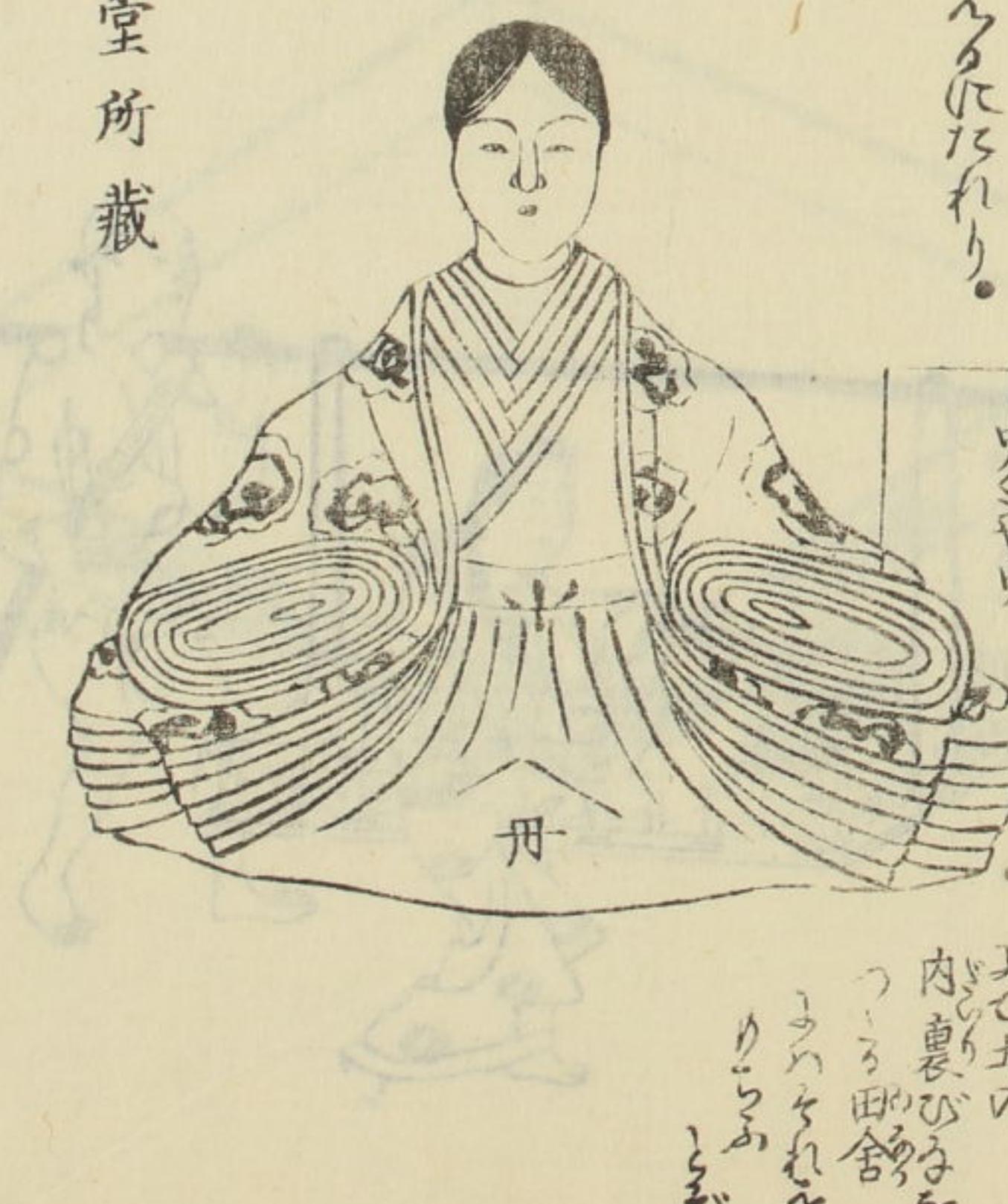
口。ク。ミ。ヤ。ウ

男。さ。と。も  
高。サ。曲。尺  
五。才。分  
丹。丸  
縫。青

わんうの  
ゆふいの  
かりて失ふ



尚志堂所藏



今も田舎より。子生れく。めぐらの三月の節より。江戸焼の土ひも。のゆをかくす。  
祝ふ。と。どうに古俗。田舎より。これ。奥列の田舎。も。土ひも。を。りらふ。と。あん。

○ 離使箇

二十一

○ 離物説  
也後と云 又云「黃へ三月云々」

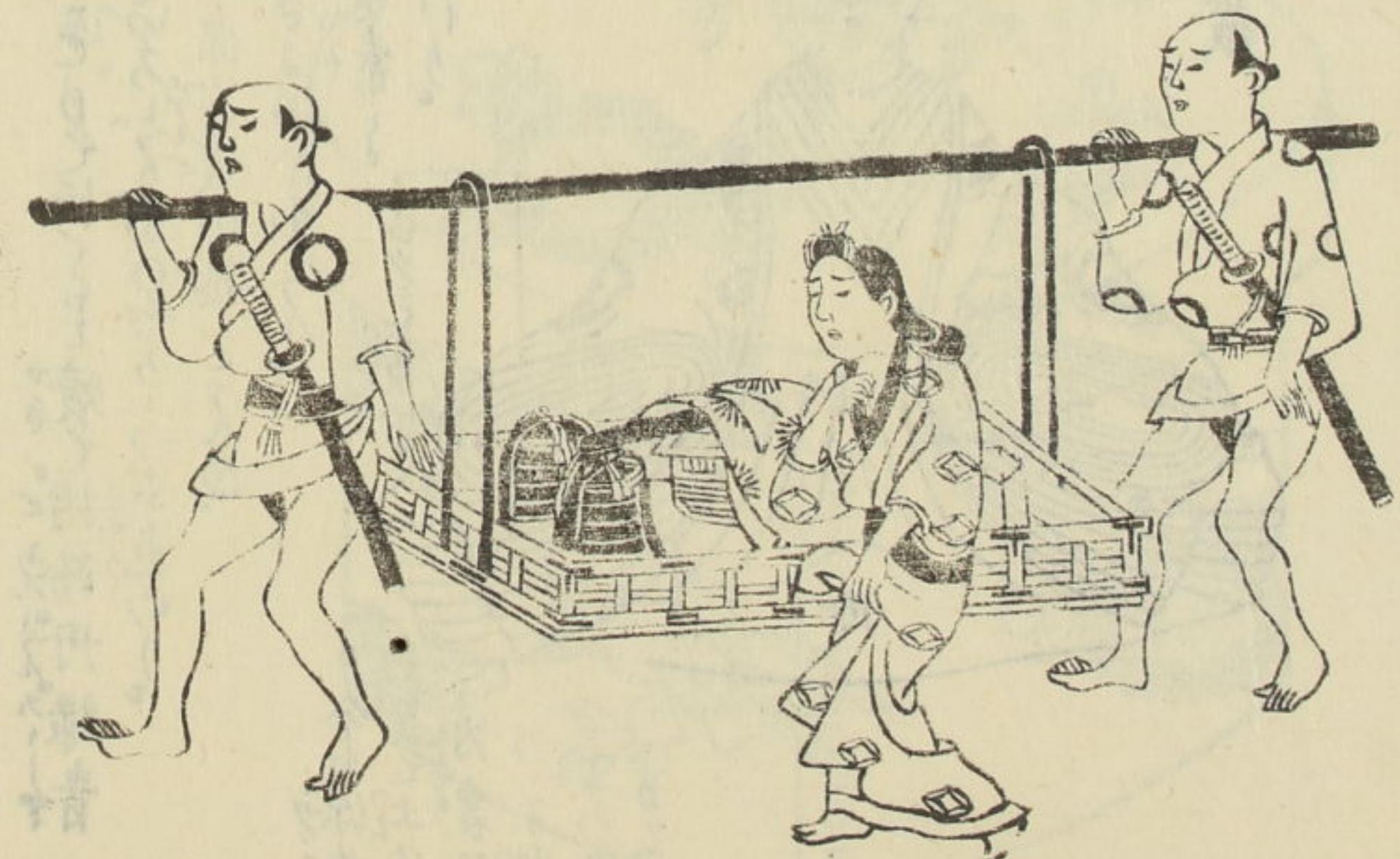
○ 天和貞草の比叡川附宣がゆりる  
年中行事の印本よ此高あり

せり離せとひゐをあがり食事本をさる。  
いふくの墨諸道具をわざり。草餅を  
ひみの不くの入體を湯又入小蛤ホを  
沢山。節句の礼とてひみを祭物よりせ。  
様不くおせん。親類へ悉くつるはと是  
どんじたれり。成人の時姫入とて世帶持の誓古あり。  
當分のあそびにあくど。にからうると此箇又  
かくゆつりひみのつひとひのそぞく  
中の品。うちもそぞく。あくとこあるべし。  
しづの離みあるだけをわらひたり。今もおあく  
えは節句があまざけをほくまでいもうあり。

○ 本朝食鑑  
元禄ハ撰 日十刻 白酒云々  
倭俗 三月三日 爲節物供離  
榮とあればこのかも白酒をも用ひたり。  
元禄十六年印行

俳諧日本国

骨董上編 下之前二五

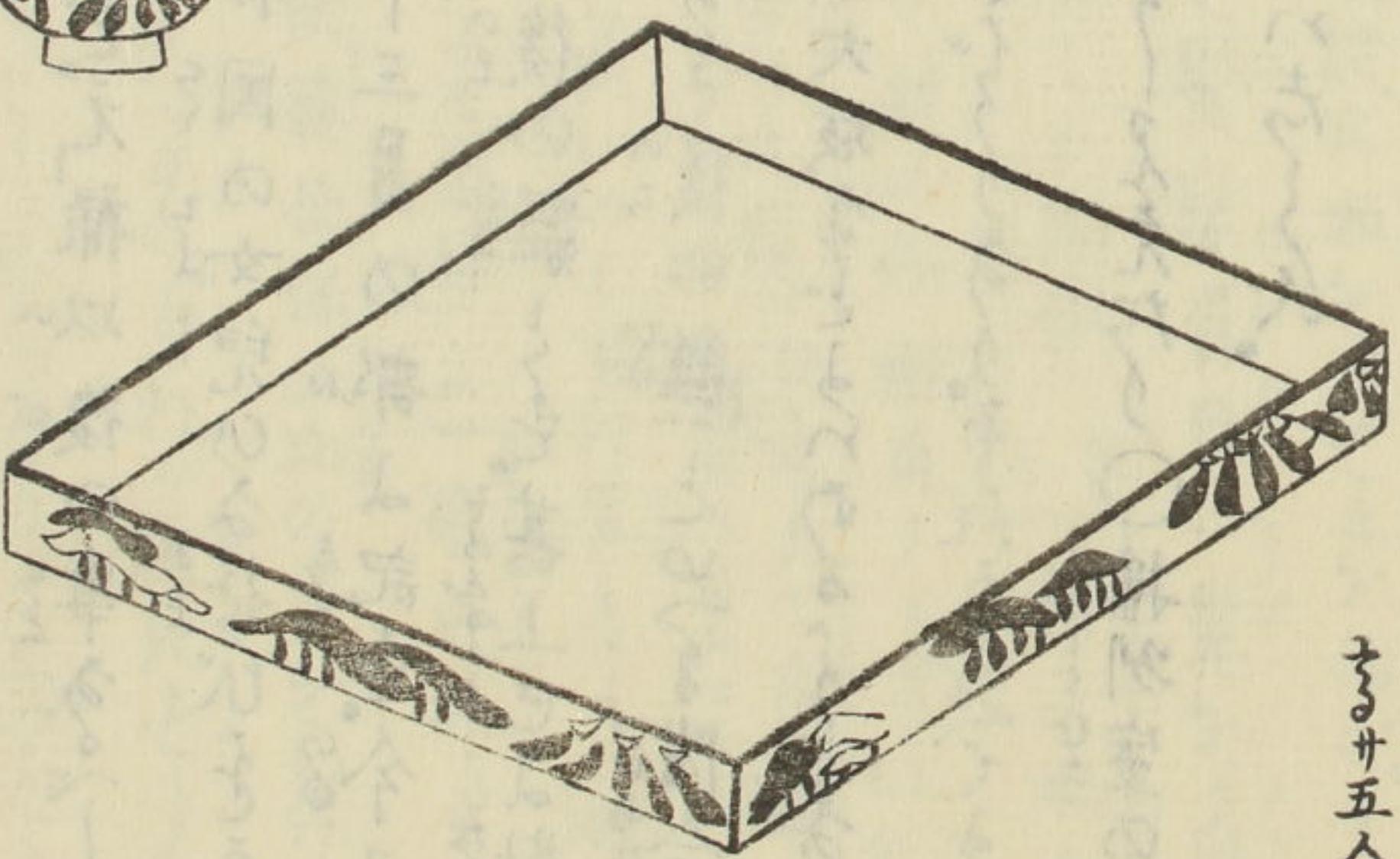


あら 興ゆき重もの上のゆりがさき  
村々 離のつひの潤の弱足 布名

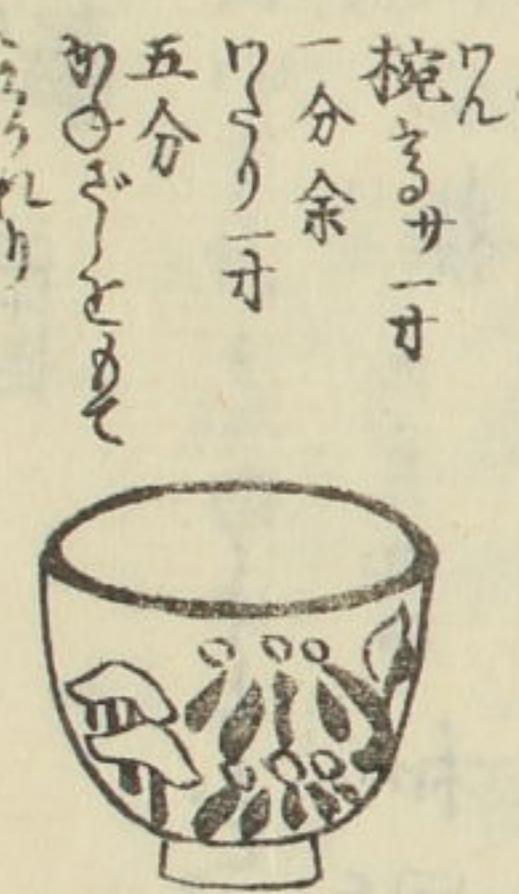
○ 離 榄折敷圖

三十二

折敷方三寸三分  
すさ五分



京都吉李庵藏



わん 榄さるサ一寸  
一分余  
五分  
かづとす  
うれり

質素ふくろて雅致あり

えん 榄ハ挽物の本地なり。折敷ハ片木の  
とくのくきのゆそ粗糙よほくき。  
これも茶北うり。丹緑青もく。松竹の  
絵あり。京師より明和安永水の比  
毛をわく。古物ふとそゆる。  
かくく。古物ふとそゆる。  
質素ふくろて雅致あり

○ 離 榄折敷圖

三十二

えん 榄ハ挽物の本地なり。折敷ハ片木の  
とくのくきのゆそ粗糙よほくき。  
これも茶北うり。丹緑青もく。松竹の  
絵あり。京師より明和安永水の比  
毛をわく。古物ふとそゆる。  
かくく。古物ふとそゆる。  
質素ふくろて雅致あり

あら

興

ゆき

重

の

上

の

ゆ

り

が

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

き

さ

○後ろの雛 ひよ

三十一

後の離の事すき物よいまざえゆくも。え禄以後の事うべ

滑 稽 言 雜 誌

晋子十七回  
年刻  
享保一  
物の止みとくさき後の圖  
門令の  
事へ  
正徳享保の比ひをよめし事へ今も京大坂あんどよんやうすれど三月の

如くどもよんむご。雛を一ツ二ツ出でやうがうりうり。それもまたよん  
吾山が朱ひときよ。りづきの塙すむあるうええたり○播州室の辻よ。ハ朔よ  
ひよを立る所ゆ。或人ひよ。其实否ひよ。

姫瓜の雛  
ひめうりのえんとうのきんぐえい  
娘丸の漢名を金鶯蛋といふ。形鶯の卵よ似たれがあり。え縁のあら後女兒  
わらわらのたまごよそなれりあり。え縁のあら後女兒  
せんごりよト

姫瓜の離  
きんがくえ  
を金鶯蛋といふ形

1

これを離す迄も半日たりて甚

雍州府志

卷之三

之三

卷之三

卷之三

九條

田間より出。其大きさ如梨。其色

少莖を留め白粉を其面に傳  
て其莖を結び揚推しく玩具

を取て眼  
鼻口の状を  
書き

三元集拾遺一千凡やち  
あらう。當時此よりあらういゆうてかくも持ふらう

ありとあやめたら其角が倒のうちまゐる  
うんの。ありとあやきたらち、  
丸兒

老矣を知べ。清少納言。母

文化十年九月八百余年大記  
和泉式部集 異本

丸うのひとのうやかわくじゆうりだる

和泉式部集

異  
本

卷之三

山城久世毛ヲ云  
此れハ凡ヨノの教<sup>マタタク</sup>キタリモムアシニモ此の  
あひづゝ人の教<sup>マタタク</sup>シテ<sup>トモ</sup>アリモ<sup>トモ</sup>因<sup>ム</sup>モ<sup>トモ</sup>此<sup>ノ</sup>  
まよほけろ心<sup>ノ</sup>のくせもたがひ<sup>ビ</sup>

山城久世毛氏  
のくせむぢ  
痴

二十五

ひるま草  
今よのきの女童めのわらわひのす草を採て雛ひなの髪をやひ紙の衣服を著せしむとーと  
卒日そくじの玩具もやぶともと。それもととむるすすりすすり丹後守たんごのかみの忠幹ちかん医家いが百首ひゃくしゅ  
契けい久ひさ源仲正げんちゆう

骨董集上編下之卷前終

首卷上編下之前半

